

日八廿月一年三十正大
濟定檢省部文

815
Kob
資料室

簡明
日本文典
完

光風館編輯所編

東京 光風館藏版

41847

教科書文庫

4

815

41-1924

20000
25661

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

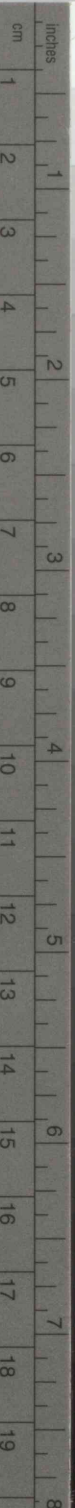


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



教
4
20



教科書文庫
4
815
41-1924
2000025661

編所輯編館風光

明 簡

日本文典

完

京 東

版藏館風光

広島大学図書
2000025661



資 料 室

815
Kob

元本

廣島大學圖書印



はしがき

本書は中等學校教授要目に準據して編纂し、大正元年十一月始めて世に出してから、前後四回修正を重ね、今又更に刷新を加へて公にするを得るに至つた。その注意を加へた要點を擧げれば

一、品詞の區別では、新に數詞を加へ、又その各論では、動詞の自他を省き、用言の活用法及び、その相互の連續法を比較的詳かにし、尙助詞の接續法をも加へ、文法の根柢に力を注いだ。

二、文章篇では、文の節を省いて、之を文の種類中に加へ、説明を簡短にした。

三、練習問題は、常に生徒の讀本を顧慮し、現代文の例を多く加へることにした。

四、口語の勢力が廣く世に認められるに至つたから、口語文語の對照を一層正確にし、特に本書全篇を通じて、説明を口語體に改めた。

五、本書は適宜に取舍を加へれば、中等程度何れの學校にも使用し得られるやう前後の照應を計つた。

要するに、秩序整然たる社會に應ずべき國語界の趨勢に順應する方針の本に改訂を加へたのであるが、尙幾多の缺陷が免れがたいと思はれるから、大方諸君子の是正を深く希望する。

大正十二年十一月

簡明 日本文典

目次

第一篇 文字篇	一—三
第一章 文字	一—三
第一節 假名	一—二
一 直音假名	一—二
二 拗音假名	二—五
三 撥音假名	六—六
四 促音假名	七—七
五 長音符送字	七—七
第二節 漢字	九—九
一 漢字和字	九—九

二 畫	九
三 偏旁冠脚	一〇
四 部首	一一
五 音讀訓讀	一二

文字摘要

第二章 假名遣

一 國語假名遣	一四—一五
二 字音假名遣	一四

第三章 品詞の區別

第一節 文	一六
第二節 名詞	一八
第三節 數詞	一九
第四節 代名詞	二〇

第五節 形容詞	二三
第六節 動詞	二四
第七節 助動詞	二六
第八節 副詞	二七
第九節 接續詞	二九
第十節 助詞	三〇
第十一節 感動詞	三一
第十二節 品詞の總括	三三

十品詞摘要

第二篇 品詞各論

第一章 助詞の種類

第一節 第一類助詞	三七—四三
-----------	-------

第二節 第二類助詞

三六

第三節 第三類助詞

四〇

助詞摘要

第二章 形容詞の種類及び活用

四三—四七

第一節 形容詞

四三

第二節 形容動詞

四四

形容詞摘要

第三章 動詞の種類及び活用

四八—五三

第一節 動詞の正格活用

四八

一 四段活用

四八

二 上二段活用

四九

三 上一段活用

五〇

四 下二段活用

五一

五 下一段活用

五三

第二節 動詞の變格活用

五四

一 加行變格活用

五四

二 佐行變格活用

五四

三 奈行變格活用

五六

四 良行變格活用

五七

動詞摘要

第四章 音便

六三—六七

一 い音便

六三

二 う音便

六四

三 撥音便

六四

四 促音便

六五

音便摘要

第五章 助動詞の種類及び活用…………… 六〇—六六

第一節 指定の助動詞…………… 六七

第二節 咏歎の助動詞…………… 六八

第三節 希望の助動詞…………… 六九

第四節 比況の助動詞…………… 七〇

第五節 推量の助動詞…………… 七三

第六節 打消の助動詞…………… 七四

第七節 時の助動詞…………… 七六

第八節 受身の助動詞…………… 七九

第九節 可能の助動詞…………… 八〇

第十節 使役の助動詞…………… 八〇

第十一節 敬語の助動詞…………… 八三

助動詞摘要

第六章 形容詞・動詞・助動詞の活用形…………… 八七—九六

第一節 形容詞の活用形…………… 八七

第二節 動詞の活用形…………… 九〇

動詞活用表

第三節 助動詞の活用形…………… 九五

助動詞活用表

第七章 用言相互の連続…………… 九九—一二

第一節 動詞と助動詞との連続…………… 九九

動詞と助動詞との連続表

第二節 助動詞と助動詞との連続…………… 一〇三

一 完了の助動詞と過去の助動詞……………一〇五

二 完了の助動詞と未來の助動詞……………一〇六

第三節 用言と助詞との連續……………一〇八

助動詞と助動詞助詞との連續表

第八章 單語の構成……………一三—一三三

第一節 熟語・疊語・接頭語・接尾語……………一三

一 熟語……………一四

二 疊語……………一五

三 接頭語……………一六

四 接尾語……………一七

第二節 品詞の轉成……………一九

一 轉成名詞……………二〇

二 轉成代名詞……………二〇

三 轉成副詞……………二二

四 轉成接續詞……………二三

單語の構成摘要

第三篇 文章篇

第一章 文の成分……………二五—三三

第一節 主語……………二五

第二節 述語……………二六

第三節 補語……………二七

第四節 修飾語……………二九

文の成分摘要

第二章 文の成分の排列……………三三—三六

第一節 正序法……………三三

第二節 倒置法……………一三三

第三節 省略法……………一三三

文の成分の排列摘要

第三章 文の種類……………一三七—一五〇

第一節 文の構成上の種類……………一三七

一 單文……………一三七

二 複文……………一三八

三 重文……………一四一

第二節 文の性質上の種類……………一四四

一 平敘文……………一四四

二 疑問文……………一四五

三 命令文……………一四六

四 感動文……………一四七

文の種類摘要

第四章 文の係結……………一五一—一五八

第一節 普通の係結……………一五一

第二節 轉結……………一五四

係結摘要

附録 文法上許容に關する事項……………一五一—一五八

目次終



明簡
日本文典

第一篇 文字篇

第一章 文字

はな。 花。
とり。 鳥。

右上段の はな とり は、各、二字から成り、下段の 花
鳥 は、各、一字から成る。上段は假名で、下段は漢字である。
我が國語を表すに用ひる文字は、通常、假名と漢字との二種
である。

假名
漢字

漢
字

第一節 假名

一直音假名

片假名
平假名

假名には二種ある。左記の上段は片假名で下段は平假名である。

ア	イ	ウ	エ	オ	あ	い	う	え	お
カ	キ	ク	ケ	コ	か	き	く	け	こ
サ	シ	ス	セ	ソ	さ	し	す	せ	そ
タ	チ	ツ	テ	ト	た	ち	つ	て	と
ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ	な	に	ぬ	ね	の
ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ	は	ひ	ふ	へ	ほ
マ	ミ	ム	メ	モ	ま	み	む	め	も
ヤ	(イ)	ユ	(エ)	ヨ	や	(い)	ゆ	(え)	よ

五十音圖
段行

いろは歌

右のやうに排列したものを**五十音圖**といふ。五十音圖の縦列を行といひ、横列を段といふ。

但、ア行の イ・ウ・エ とヤ行の イ・エ 並びに ワ 行の ウ は、同字であるから、實は、假名の數は、四十七字である。

平假名は通常、いろは歌で記される。

いろはにほへと
ちりぬるを
わかよたれそ
つねならむ
うみのおくや
まけふこえて

假名

濁音

半濁音

直音假名

あ さ き ゆ め み し
ゑ ひ も せ す

片假名平假名四十七字の外に、左のやうに、右肩に濁點、を附けたものが二十字、半濁點。を附けたものが五字ある。故に假名の數は、合計七十二字である。

ガギグゲゴ がぎぐげご
ザジズゼゾ ざじずぜぞ
ダヂヅデド だぢづでど
バビブベボ ばびぶべぼ
パピプペポ ぱぴぷぺぽ

以上は、單純に發する音、即ち、直音を寫すに用ひられるから直音假名といふ。

二 拗音假名

しやしん寫眞

きんぎょ金魚

きじゆつ記述

くわいくわつ快活

右の しや ぎよ じゆ ぐわ の如く、或る音に や ゆ よ 又は わ を添へ、彼此密接して殆ど、同時に發する音を拗音といふ。拗音の表し方、及び其の普通なものを擧げれば左のやうだ。

キヤ	キユ	キヨ	きや	きゆ	きよ
ギヤ	ギユ	ギヨ	ぎや	ぎゆ	ぎよ
シヤ	シユ	シヨ	しや	しゆ	しよ
ジャ	ジュ	ジョ	じゃ	じゆ	じよ
チャ	チュ	チョ	ちや	ちゆ	ちよ
ヂヤ	ヂユ	ヂヨ	ぢや	ぢゆ	ぢよ

假名

撥音

ニヤ	ニユ	ニョ	にや	にゆ	によ
ヒヤ	ヒユ	ヒョ	ひや	ひゆ	ひよ
ピヤ	ピユ	ピョ	ぴや	ぴゆ	ぴよ
ミヤ	ミユ	ミョ	みや	みゆ	みよ
リヤ	リユ	リョ	りや	りゆ	りよ
クラ			くわ		
グワ			ぐわ		

三 撥音假名

さかんなり盛。ゆゑん所以。
 わらんべ童。しんぶん新聞。

右のやうに、或音の下に附いて、撥ねて發する音を撥音とい

ふ。撥音を表すには、ん(ン)の字を用ひる。

四 促音假名

ざつし雜誌。しつき漆器。
 ほつす欲。もつとも最。

促音
 右のやうに、或音の下に附いて、促つて發する音を促音といふ。促音を表すには、つ(ツ)の字を用ひる。

(外又凡)

五 長音符 送字

長音符

あるこゝる酒精。ほゝる球。
 かく、長く引く音を表すには、ゝを用ひる。これを長音符といふ。これは符號である。
 チ、父。はゝ母。みるゝ見々。おしわけゝ押分々々。

送字

すゞめ雀 とゞむ止 とりと取々 かへすと返々。
かく、同じ假名を重用するときは、
ひる。これを送字といふ。其の繰返す假名が濁音であるときは、送字に濁点を施すを常とする。

練習

一 平假名にて、五十音圖を記せ。

二 片假名にて次の語の讀方を記せ。

植物。散步。關所。茶屋。困難。發達。顔色。果實。寫真術。

鯨。

三 片假名と平假名とにて、次の語の讀方を記せ。

天守閣。菟蓐。所轄。問屋。出席。攝津。建築。附着。佛閣。

四 長音符を用ふべき語、五箇を挙げよ。

五 平假名にて、次の語を記せ。

吳々も。様々。賑々し。涉々し。花々し。

吳々 様々 柳

第二節 漢字

一 漢字 和字

漢字

漢字は、支那から我が國に傳つたもので、其の数が四五萬もあるが、普通用ひられるものは、凡そ三四千である。

和字

漢字の外に、我が國で、漢字の形を摸して作れるものが、數十種ある。これを和字といふ。例へば、

奴 モンメ。 榊 サカキ。 辻 ツジ。 峠 タウゲ。 躰 シツケ。 鎧 ヤリ。 廳 ヤガテ。

などのやうなものである。

二 畫

漢字を書くに、其の一筆を畫といふ。例へば、

一 乙 は一畫から成る。

畫

人刀 は二畫から成る。
 土女 は三畫から成る。
 石仙 は五畫から成る。
 見杉 は七畫から成る。
 の類である。

三 偏ヘン 旁ツクリ 冠カムリ、カンムリ 脚アシ

崎柳地の山木土などのやうに、文字の左側にある部分を偏といふ。
 功硯鳩の力見鳥などのやうに、文字の右側にある部分を旁といふ。
 家岩空の山穴などのやうに、文字の頭にある部分を冠といふ。

偏 旁 冠

脚

迎越麴の走麥などのやうに、文字の脚にある部分を脚といふ。

部首

四 部首

漢字は、字義によつて部類を分けてある。これを部首といふ。例へば、

- | | |
|-----|-----|
| 地坂堀 | 土の部 |
| 松杉梅 | 木の部 |
| 盆盃盛 | 皿の部 |
| 筒笛笠 | 竹の部 |
| 雪雲霜 | 雨の部 |

などの類である。而して、部首は、其の數、凡そ、二百十四種で、特別の名稱を有するものもある。例へば、

漢字

イ人偏ニン、イ行人偏ギョウ、ン二次ニ、シ三水サン、才手偏テ、才獸偏ジュウ、
 川連火レン、月肉月ニク、貝小貝コ、頁大貝オホ、小邑コ、大邑オホ、
 の類である。

五 音讀 訓讀

音讀 訓讀

漢字を音のまゝに唱へるのを音讀といひ、國語に譯して讀むのを訓讀といふ。例へば

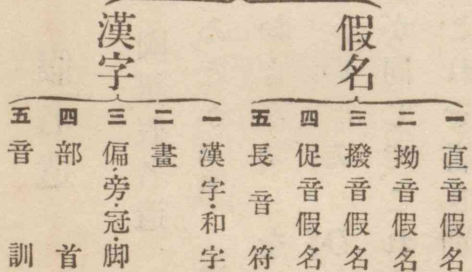
天 <small>テン</small>	地 <small>チ</small>	上 <small>ジョウ</small>	下 <small>カ</small>	伯父 <small>ハクフ</small>	紅葉 <small>コウエフ</small>	音讀
天 <small>テン</small>	地 <small>チ</small>	上 <small>ジョウ</small>	下 <small>カ</small>	伯父 <small>ハクフ</small>	紅葉 <small>コウエフ</small>	訓讀
天地 <small>テンチ</small>	地上 <small>ジョウヂ</small>	地下 <small>カ</small>	伯父 <small>ハクフ</small>	紅葉 <small>コウエフ</small>		

の類で、又手代重箱などのやうに、音訓雜へて讀むこともある。

練習

- 一 左の文字の畫を問ふ。
父。親。風。霞。富。

文字摘要



- 二 左の文字の部首を擧げよ。
仁。嶮。郡。雞。岳。
- 三 和字と漢字との異同を問ふ。
- 四 左の文字の音訓を問ふ。
雲。強。學。物。空。
- 五 特別の名稱ある部首五箇を擧げよ。

第二章 假名遣

一 國語假名遣

國語假名遣

いち市。 ゐなか田舎。 たひ鯛。 えだ枝。 ゑさ餌。
いへ家。 おきな翁。 をとこ男。 かほ顔。
國語には、右の い、 ゐ、 ひ、 え、 ゑ、 へ、 お、 を、 ほ
のやうに、發音が同じで、これを記載する假名の異なるもの
が少くない。 これを書き別ける法を國語假名遣といふ。

二 字音假名遣

央あう。 凹あふ。 應おう。 王わう。 翁をう。
校かう。 甲かふ。 光くわう。 公こう。 劫こふ。
漢字には、右のやうに、その發音が同じで、これを記載する假

字音假名遣

名の異なるものが少くない。 これを書き別ける法を字音
假名遣といふ。

第三章 品詞の區別

第一節 文

花 犬
美し 走る

右のやうに、それ／＼一つの意義を表す語を單語といふ。此等の語は、適當に連續されるときは纏まつた思想を表す。

(文語)

花美し。

(口語)

花が美しい。

犬走る。

犬が走る。

右のやうに、纏まつた思想を表すものを文といふ。文には、花 犬 のやうな、思想の題目となる語と、美し 走る

文

單語

主語
述語
品詞

のやうな、題目を叙述する語とを要す。ある思想の題目となる語を、主語といひ、その題目を叙述する語を、述語といふ。單語は其の成立によつて數種に分る。かやうな單語の種類を品詞といふ。以下之を説かう。

練習

一文とは何ぞ。

二主語、述語を説明せよ。

三左の文につき主語と述語とを指示せよ。

(イ) 空が晴れる。(口語)

(ロ) 友人が來た。(口語)

(ハ) 飛行機飛ぶ。

(ニ) 圖書館がある(口語)

(ホ) 樂の音聞ゆ。

(ヘ) 山岳聳ゆ。

第二節 名詞

東京は武藏にあり。
秀吉、朝鮮を伐つ。

太郎の机の上には鉛筆と試験の問題とがある。(口語)

右の例で、東京 武藏 秀吉 朝鮮 太郎 机 鉛筆

名詞

試験 問題 は、事物の名を表す。かういふ語を名詞とい

ふ。而して 東京 武藏 秀吉 朝鮮 太郎 は、その事

固有名詞

物に限れる名であるから、固有名詞といひ、机 鉛筆 試

普通名詞

験 問題 は同種類の事物に共通する名であるから、普通

名詞といふ。

練習

一名詞とは何ぞ。

二 固有名詞・普通名詞を説明せよ。

三次の文中の名詞を指摘し、且その種類を挙げよ。

(イ) 儉約は美德である。(口語)

(ロ) 運動は身體を強壯にす。

(ハ) 日本海の家戦で東郷大將の名が世界に轟いた。(口語)

(ニ) 欽明天皇の朝百濟より、佛像及び經論を獻ず。

(ホ) 歐洲に留學すること三年、西比利亞鐵道を經由して歸朝せり。

第三節 數詞

一本二錢の鉛筆五ダースあり。

太郎は第一に五番目の問題に答へた。(口語)

右の例で 一本 二錢 五ダース は事物の數量を表し、

第一 五番目 は事物の順序を表してゐる。かういふ語

を數詞といふ。

數詞

練習

- 一 數詞とは何ぞ。
- 二 名詞と數詞との區別を問ふ。
- 三 左の文中の數詞を指摘せよ。
 - (イ) 十五人に九人を加ふれば、答二十四人となる
 - (ロ) 毎日二里三里も往復する者がある。(口語)
 - (ハ) 第一號から第五十號まで合格です。(口語)
 - (ニ) 四月十五日校友會雜誌二十週年記念號を發行せられたり。
 - (ホ) 生徒總數の三分の二は男子であります。(口語)

第四節 代名詞

私は君の父に遇つた。(口語)
 これは飛行機の模型なり。
 かれはかなたへ向ひていづくにか行けり。

人代名詞
指示代名詞

右の 私 君 これ かれ かなた いづく は、何れも
 名詞の代りに用ひられてゐる。かういふ語を代名詞とい
 ふ。
 右の例で 私 君 かれ は、人の名の代りに用ひられて
 ゐるから、人代名詞といひ、これ いづく かなた は事
 物、場所、方向を示してゐるから指示代名詞といふ。代名詞
 を表示すると左のやうである。

人代名詞表

自	稱	對	稱	他	稱	不	定
(文) わ われ わらは(女)	(口) 私	(文) な なれ 汝(女) 御許(女)	(口) あなた おまへ	(文) か かれ	(口) あれ あのかた	(文) た たれ	(口) だれ どなた
僕 余		君	君				

〔注意〕 わたしには助詞がを、かには助詞のを添へて次の語に続ける。

指示代名詞表

	近	稱	中	稱	遠	稱	不定	稱
事物	こ (文)	これ (口)	それ (文)	それ (口)	かれ (文)	あれ (口)	いづれ (文)	どれ (口)
場所	ここ	ここ	そこ	そこ	かしこ	あそこ	いづく	どこ
方向	こちら こなた	こつち こちら	そなた そち	そつち そちら	あなた あち	あつち あちら	いづかた いづち	どつち どちら

〔注意〕 こ、そ、か、あには助詞のを添へて次の語に続ける。

練習

一 代名詞を説明せよ。

二 二人代名詞と指示代名詞とを問ふ。

三 左の代名詞を分類せよ。

これ。それ。そこ。いづく。小生。貴殿。いづかた。いづれ。なに。殿下。わらは。

四次の文中にある代名詞を挙げ、且その種類を指示せよ。

- (イ) あなたはこの事をどうお考へですか。(口語)
- (ロ) それは過日申した通り、何の譯もありません。(口語)
- (ハ) こゝにある杖は、誰の所有なるか。
- (ニ) 今の音はこちらから起つた。(口語)
- (ホ) 某は確なる人物故、この事を託すべし。
- (ヘ) 警固の武士ども、これを見つけて、何事を如何なる者の書きたるか、と読みかねて上聞に達したり。

第五節 形容詞

かれの性質は甚だ善い。(口語)

形容詞

山は高く、水は深し。
右の 善い は、事物の性質を表し、高く 深し は、事物の状態を示してゐる。かういふ語を形容詞といふ。

練習

- 一 事物の性質を表せる形容詞五種を問ふ。
- 二 事物の状態を表せる形容詞五種を問ふ。
- 三 次の文中より形容詞を挙げよ。

- (イ) 賤しい人にも貴い行がある。(口語)
- (ロ) 早く出来るものは保ち難い。(口語)
- (ハ) 硝子は脆いから、碎け易い。(口語)
- (ニ) 荒き風烈しき雨の後には、よき日和あり。
- (ホ) 富士の高峰を遠く雲の上に望み、白き砂地を近く目の前に見る。

第六節 動詞

動詞

字を書き、本を読む。
庭に櫻の木がある。(口語)
右の文中、書き、読む は、事物の動作を、ある は、存在を表してゐる。かういふ語を動詞といふ。

練習

- 一 動詞とは何ぞ。
- 二 動詞を五種挙げよ。
- 三 左の文中の動詞を指示せよ。
- (イ) 蠶は絲を吐き、蜂は蜜を醸す。
- (ロ) 敷島の大和心を人問はば、朝日に匂ふ山櫻花。
- (ハ) 電閃き、雷響き、豪雨進む。
- (ニ) 九分は足り、十分は溢ると知るべし。
- (ホ) 地殻に裂目が出来ると、水蒸氣や、岩の缺けや、熔岩などが噴出することがある。(口語)

第七節 助動詞

明日公園に遊ばむ。

幼時より勉強すべし。

孝子は人に譽められる。(口語)

助動詞
右の むべし られる は、何れも動詞に添うて、その意を助く。かういふ語を助動詞といふ。

但、忠臣は又孝子なり。北京は支那の首都たり。日本三景とはこれなり。彼の成績は悪しきなり。之を詳にせり。其の美は花の如し。彼れは更に怠らざりき。のやうに、動詞に添ふ外、名詞・代名詞・形容詞・副詞稀には助詞にも添ひ又他の助動詞にも添ふことがある。

練習

一 助動詞とは何か。

二 左の文につき助動詞を指摘せよ。

- (イ) 天才必ずしも恃むに足らず。
- (ロ) 空しく一日を過すは、惜むべき事である。(口語)
- (ハ) 母校の運動會に誘はれた。(口語)
- (ニ) 十五夜に影を見せざりし月は、今宵照り出でぬ。
- (ホ) 正義は主君の敵にて我が爲にも父の仇なり。如何にもして討取り申すべし。

第八節 副詞

靜に歩め、我が子よ。

この花は甚だ美しい。(口語)

右の 靜に は、動詞歩めに、甚だ は、形容詞美しいに添ひ何れもその意義を制限してゐる。かういふ語を副詞と

副詞

いふ。

富士山最も高く聳ゆ。

形甚だ明かに見ゆ。

右の最もは副詞 高くに、甚だは副詞 明かに

に添うて、それと、その意義を制限してゐる。副詞は、かく

他の副詞にも添ふことがある。

副詞は、動詞・形容詞或は他の副詞に添うて、その意義を制限する語である。

練習

一 副詞を説明せよ。

二 左の文中より副詞を指摘し、且その制限せらるゝ語を示せ。

(イ) よく遊びよく務めるがよい。(口語)

(ロ) 雨はらくと降りそぐ。

(ハ) 敵軍防戦最も力む。

(ニ) 一島未だ去らざるに、一島更に現れ、水路窮るが如くにして、また、忽ち開く。

(ホ) ルーゾヴェルト氏は、必ずしも早起の人ではありませぬが、朝七時と八時との間には、必ず家人と共に朝食を済まし、直に書状を認め、又は、寄稿論文の起草に従事します。(口語)

第九節 接續詞

お花は書を読み、且、字を習ふ。

かれは運動好で、又、勤勉家である。(口語)

この事は善なるか、はた、悪なるか。

右の 且、又、はた、は何れも、文又は、語句の間にあつて、

接續の用をしてゐる。かういふ語を接續詞といふ。

接續詞

接續詞

練習

一 接續詞とは何ぞ。

二 左の文につきて接續詞を指示せよ。

(イ) 霞か雲かはた雪か。

(ロ) 敵軍戦ひ且退く。

(ハ) 文を學び或は武を講ず。

(ニ) 春になりぬ。されど尙冬の心地す。

(カ) 士氣大いに振ふ。従ひて大捷の近きを知る。

(ヘ) 修身國語及び算術の三科に力を注いでゐる。(口語)

(ト) 拙宅一同無事に暮し居り候間御安心下され度候。

第十節 助詞

小兒は筆を持つ。

花の香が芳しい。(口語)

本を机の上に載す。

私が先生から聞きました。(口語)

右の例にある「は」「を」「の」「に」「が」「から」は、名詞代名

詞・動詞等の間に加はつて、相互の關係を保ち、文句の意義を

完全にしてゐる。

このやうに、名詞・代名詞・動詞等の間にあつて、相互の關係を

定める語を助詞といふ。

(注意) 助詞は又乎爾乎波關係詞ともいふ。

練習

一 助詞とは何か。

二次の文につきて助詞を指摘せよ。

(イ) 松は幾年経れども、緑の色を變ぜず。

(ロ) 君は、横濱から倫敦へ行く航路を知つてゐるか。(口語)

助詞

(ハ) さりくす、夜寒に秋のなるまゝに、弱るか聲の遠ざかり行く。
 (ニ) 書生に望む所は、小學問と小才智とに高慢せず、世波に身を投じ、辛酸を嘗めて生死の試験を受くるにあり。この試験に落第するが如き者は論ずるに足らず。

第十一節 感動詞

感動詞

甲
 あゝ、樂し。
 いざ行かむ。
 あはれ日の御旗。
 やあ者ども。
 右の あゝ、いざ あはれ
 は、物事に感動せしとき、自然に發する聲音である。このやうな語を感動詞といふ。

乙
 さやけき月かな。
 蝶よ花よ。
 珍しの事や。
 蟲の聲聞けは悲しな。
 やあ かな よ や かな

感動詞には、甲のやうに、他語の上に添ふものと、乙のやうに、他語の下に添ふものがある。

練習

一 感動詞とは何か。
 二次の文につき感動詞を指摘せよ。

- (イ) あら嬉しや。
- (ロ) すは突進よ。
- (ハ) あゝ誠忠なるかな楠公。
- (ニ) 花の色は移りにけりな。花は我身世にふる
- (ホ) 古の書見る度に思ふかな、おのが治むる國はいかにと。

第十二節 品詞の總括

十品詞 體言

以上述べた所によつて、單語に十種の別、即ち十品詞のあることが明かである。この中名詞・代名詞・數詞をば體言、動詞・

助言
助辭

形容詞をば用言、助詞、助動詞をば助辭といふ。

一名 詞……普通名詞 固有名詞。

二數 詞……事物の數量又は順序を表はす。

三代名詞……人代名詞。

四形容詞……指示代名詞。事物の性質又は状態を表す單語。

五動 詞……事物の動作又は存在を表す單語。

六助動詞……(イ)動詞に添うてその意義を助くる單語。

(ロ)名詞代名詞、形容詞、動詞、助詞に助詞にも添ふこともある。

(ハ)他の助動詞に添ふこともある。

七副 詞……(イ)動詞、形容詞に添うてその意味を制限する單語。

(ロ)他の副詞に添ふこともある。

八接續詞……(イ)他語の上に添うて感動を表すもの。

(ロ)他語の下に添うて感動を表すもの。

十品詞摘要

九助 詞
十感動詞

語句と語句との間にあつて相互の關係を示す單語。

(イ)他語の上に添うて感動を表すもの。
(ロ)他語の下に添うて感動を表すもの。

練習

左の文につきて品詞を判別せよ。

一 艱難汝を玉にす。

二人の一生は重荷を負ひて遠きに行くが如し。

三 果して空中を支配する時代が來た。(口語)

四 書は人生に新觀察を與へ、いかに生活すべきかを吾人に教へるものである。(口語)

五 元來人の精力は、限りあるものなれば、非常に勉強するは、却て非常の怠を生ずる本となることあり。

六 公德とは、公衆の衛生を重んじ、社會の規律を尊び、公共の物品を大切にす等、總べて衆人の利害を考へて、その行爲をつゝしむ

徳義をいふ。

七私の今回歐米を視察致しましたのは、大戦後世界各國が教育上如何なる施設をして居るかといふことを調査する目的でありました。(口語)

第二篇 品詞各論

第一章 助詞の種類

第一類
第二類
第三類

助詞は、名詞・代名詞・動詞等の間にあつて、相互の關係を定めるものであることは、既に述べたやうである。而して用法によりて三類に分れる。第一類名詞・代名詞に添ひ、事物と事物及び動作との關係を示すもの。第二類種々の語に添ひ種々の意味を云ひ添へるもの。第三類動詞・形容詞・助動詞に添ひ、接續の役目をなすものこれである。

第一節 第一類助詞

友の手紙我が日本(共に所有を表す)

花の散る。雨が降る。(共に動作を起す) 櫻の花。天が下。(共に二語の係属を示す)

師に問ふ。(相對するものを指す) 彼方へ行く。(方向を示す)

月に叢雲。(添ふる意を示す)

月と花と。(並列の意を示す) 君と行かむ。(と共にの意を示す)

友を戒む。(動作の目的を示す) 京都より歸る。(起點を示す)

彼れより優る。(比較の意を示す) 上野まで御供せむ。(到着點を示す)

右のものがにへとをよりまでなどである。而してのがにとなどは尙種々の意義に用ひられる。

〔注意〕口語では起點を示すよりはからとなり並列を示すとは最後の「を」を省く。その他は略文語に同じい。

第二節 第二類助詞

葉は青し。彼をば好む。(何れも特に事物を取出す意を示す)

花も咲く。捨つるも惜し。(共に事物の一致を示す)

今日ぞ楽しむ。楽しき。(上の語を強く指す意を示す) 知るや知らずや。

是か非か。(共に疑問を示す) 花こそ見ぬ。(ぞなむより一層強き意を示す)

雨さへ降る。(あるが上に添ふる意を示す) 讀むだに難し。(でもの意を示す)

小兒すら知る。(までの意を示す) 勉強のみ好む。雨ばかり降る。

(共に或る物を限る意を示す) 今日しも都に著く。(語句を強める意を示す)

必ず忘るな。(禁止の意を示す) 春な忘れそ。(相呼應して禁止する意を示す)

右の は ば も ぞ なむ や か こそ さへ だ に すら の み ばかり し な な そ などである。

〔注意〕文語のやは口語か、だにはでも、すらはさへ、さへはまでとなることは前例のとほりである。

第三節 第三類助詞

讀まばよまれむ。(假定の意を表す。)

讀めば讀まる。(確定の意を表す。)

問へども答へず。(共に確定の意を表はす。)

問ふとも答へじ。(假定の意を表す。)

年も行かぬに智多し。

友來りしを居らざりき。

成績優等なるが尙勉強す。(共に背反なる意を表す。)

書を読みて字を習ふ。(語句を援續する意を示す。) ものを言はて佇

む。(すての約りたるもの。) 話を聞きつつ書く。(つを重用したるもの。)

右の ば ども とも に を が て で つつ などである。

その他 にて とて して にして として など同類である。

〔注意〕 文語の確定のばは、口語ではのでから、假定のともはても、をばに、つゝはながら、ではないでとなる。その他大概相同じい。

練習

一 助詞とは何か。

二 助詞の種類を問ふ。

三次の文中〇の處に適當なる助詞を加へよ。

- (イ) 月〇花〇〇見る。
- (ロ) 人皆惡し〇いふ〇〇、悉く之を信ずべからず。
- (ハ) 東〇方〇行け〇、小川〇上〇石橋〇架れるあり。
- (ニ) 總計幾人なる〇又區別〇如何。
- (ホ) 良友あれ〇惡〇陥らず。
- (ヘ) 死す〇〇退くこと勿れ。
- (ト) かれ〇勉強すれ〇〇進歩せず。
- (チ) 御隙〇候は〇御來車下されたく候。

(リ) 急がず 滯れざらまし 旅人 あと 晴る 野路 村雨。

第一類

詞に連なるもの。の が に へ と を より まで等……名詞代名

助詞摘要

第二類

は ば も ぞ なむ や か こそ だに すら
さへ のみ ばかり しな なーそ等……種々の語
に連なるもの。

第三類

ば ども とも に を が て で つつ 等
……動詞形容詞助動詞に連なるもの。

第二章 形容詞の種類及び活用

第一節 形容詞

形容詞は 高し 深し などのやうに事物の状態を示すものと、善し 悪し などのやうに事物の性質を示すものとあるは、既に述べたが、尙その形式から見ると、左の二類に分れる。

久^ク活^ク用^ク高^{カク} たかく たかし たかき たかけれ

志^シ久^ク活^ク用^ク樂^{ラク}したのしく たのし たのしき たのしけれ

たか たの のやうに、變化しない部分を語根といひ、く
しき けれ、しく しき しけれ のやうに、變化

する部分を語尾といひ、かく變化することを活用といふ。
形容詞の語尾の く しき けれ と活用するものを

語根 語尾 活用

久活用
志久活用

久活用といひ、しくししきしけれと活用するものを志久活用といふ。

口語では、形容詞の活用が左のやうである。

久活用—高 たかく(う)たかい たかい たかけれ

志久活用—樂したのしく(う)たのしい たのしい たのしけれ

右のやうに、口語では、久活用はその語尾しきは

となり、志久活用ではししきはしいとなる。

又兩活用共に、くは往々うとなることがある。

第二節 形容動詞

形容詞のくの語根から動詞ありに連なり、約つて左のやうに活用することがある。

一、善(くあ)か
嬉し(くあ)か
らりるれ

但、口語では善かり嬉しかりを善くある嬉しくあるのやうに原記のまゝにいふ。

又速に、明かになどのに、判然と洋々となどのとから動詞ありに連なり約つて、左のやうに活用することがある。

二、明か(にあ)な
洋々(とあ)た
らりるれ

但、口語では明かなりを明かである(だ)明かなり月を明かな月爛漫たりを爛漫である(だ)爛漫たる花を爛漫な花などのやうにいふ。

右二種は、形態は動詞に似て、役目は形容詞と同じい。故に

形容動詞

之を形容動詞といふ。

練習

- 一 形容詞とは何か。
- 二 形容詞の種類を問ふ。
- 三 口語形容詞と文語形容詞とを比較せよ。
- 四 形容動詞とは何か。
- 五 左の文につきて形容詞を指摘し、且その種類を示せ。
 - (イ) 父母の恩は山よりも高く、海よりも深し。
 - (ロ) 我が親しい朋友は、學年試験に最良な成績を得た。(口語)
 - (ハ) むづかしい問題でも、よく考へれば出来易い。(口語)
 - (ニ) 地味豊饒たる我が邦は河海に魚介の利多く、優美溫雅なる山川は常に險上に愛を湛ふるが如し。
 - (ホ) 高く、低く、緩く、はやく、物哀れな調子で歌ふ女史の美音に満場さながら、水を打つたやう。美妙な曲の進むにつれて夥しい

聽衆の目は、涙に曇つた。(口語)

形容詞摘要

久	活(高)	く	し	き	けれ
志	久	く	し	き	けれ
活(樂)	善	く	し	き	けれ
形容動詞	明か	なり	なり	なる	なれ
洋々	なり	なり	なり	なる	なれ
たり	なり	なり	なり	なる	なれ
たり	なり	なり	なり	なる	なれ
たり	なり	なり	なり	なる	なれ
たり	なり	なり	なり	なる	なれ
たり	なり	なり	なり	なる	なれ
たり	なり	なり	なり	なる	なれ

第三章 動詞の種類及び活用

鳴か なき なく なけ
 積ら つもり つもる つもれ
 加へ くはふ くはふる くはふれ

動詞も右のやうに變化しない部分と變化する部分とを有する。その變化しない部分を語根といひ、その變化する部分を語尾といひ、その變化することを名づけて活用といふ。動詞はその活用の異なるに従つて、正格活用五種、變格活用四種の九種類に分れてゐる。

第一節 動詞の正格活用

一 四段活用

語根
語尾
活用

四段活用

動詞の語尾が、五十音圖の第一・第二・第三・第四の四段に互つて活用するものを四段活用といふ。その活用が六種ある。

- | | | | | |
|------|-----|-----|-----|------|
| 一、書か | かき | かく | かけ | (か行) |
| 二、押さ | おし | おす | おせ | (さ行) |
| 三、打た | うち | うつ | うて | (た行) |
| 四、習は | ならひ | ならふ | ならへ | (は行) |
| 五、讀ま | よみ | よむ | よめ | (ま行) |
| 六、降ら | ふり | ふる | ふれ | (ら行) |

二 上二段活用

動詞の語尾が、五十音圖の第二・第三の兩段に互つて活用し、且、第三段にるれれの添ひて活用するものを上二段活用といふ。その活用が六種ある。

上二段活用

上一段活用

- 一、生¹ いく いくる いくれ (か行)
- 二、落¹ち おつ おつる おつれ (た行)
- 三、生¹ひ おふ おふる おふれ (は行)
- 四、浴¹み あむ あむる あむれ (ま行)
- 五、悔¹い くゆ くゆる くゆれ (や行)
- 六、懲¹り こる ころる ころれ (ら行)

三 上一段活用

動詞の語尾が五十音圖の第二段にのみ活用し、之に
 れの添ひたるを上一段活用といふ。その活用が六種あ
 る。

- 一、着¹ きる きれ (か行)
- 二、似¹ なる きれ (な行)

い列一段活
用

- 三、干¹ ひる ひれ (は行)
- 四、見¹ みる みれ (ま行)
- 五、射¹ いる くれ (や行)
- 六、居¹ ある くれ (わ行)

口語では、上二段活用の動詞は、恰も上一段活用の動詞のや
 うに活用する。

- 例へば、
- 生き いきる いきれ
 - 懲り ころる ころれ

のやうである。故に、上二段上一段相合して、い列一段活用
 をなしてゐる。

四 下二段活用

動詞の語尾が五十音圖の第三・第四の兩段に互つて活用し、且第三段に **る**、**れ** の添ひて活用するものを下二段活用といふ。その活用が十種ある。

一、得	う	うる	うれ	(あ行)
二、掛	かく	かくる	かくれ	(か行)
三、馳	はす	はする	はすれ	(さ行)
四、隔	へだつ	へだつる	へだつれ	(た行)
五、重	かさぬ	かさぬる	かさぬれ	(な行)
六、加	くはふ	くはふる	くはふれ	(は行)
七、求	もとむ	もとむる	もとむれ	(ま行)
八、聳	そびゆ	そびゆる	そびゆれ	(や行)
九、隠	かくる	かくるゝ	かくるれ	(ら行)
十、植	うゝ	うゝる	うゝれ	(わ行)

五 下二段活用

動詞の語尾が五十音圖の第四段にのみ活用し、之に **る**、**れ** の添ひたるを下二段活用といふ。その活用一種あるのみ。

蹴 ける けれ (か行)

口語では、下二段活用の動詞は、恰も下二段活用の動詞のやうに活用す。例へば、

掛け かける かけれ
求め もとめる もとめれ

のやうである。故に下二段・下二段下一段相合して、え列一段活用に於て、

以上五種類の活用を正格活用と總稱する。

え列一段活用
正格活用

第二節 動詞の變格活用

一 加行變格活用

動詞の語尾が加行の第五第二第三の三段に互つて活用し且第三段に くる くれ の添ひて活用するものを加行變格活用といふ。此の動詞には 來 の一語があるのみである。

來 き く くる くれ (か行)

但、口語では「春來」を「春が來る。」と云ふ。

二 佐行變格活用

動詞の語尾が佐行の第四第二第三の三段に互つて活用し、且第三段に する せし せす の添ひて活用するものを佐行變格

活用といふ。此の動詞には 爲 御座 の二語があるのみである。

爲 し す する すれ

但、口語では「旅をす」賢くおはすを「旅をする」賢くおはすと云ふ。

國語の名詞又は漢語を動詞として用ひるには、すべて此の活用による。例へば、

旅 せし する すれ

出張 せし する すれ

議論 せし する すれ

のやうである。又漢語を動詞とする時、發音の便宜上、濁つて言ふことがある。例へば、

生
案 ぜ じ ず ずる ずれ
などの類である。

三 奈行變格活用

動詞の語尾が奈行の第一・第二・第三・第四の四段に互つて、活用し且第三段に「る」の添ひて活用するものを奈行變格活用といふ。此の動詞には「死ぬ」往ぬの二語があるのみである。

死な しに しぬ しぬる しぬれ しね
但、口語では「死ぬる人」を「死ぬ人」「人死ぬれば」を「人が死ねば」のやうにいふ。故にこの活用、口語では、
死な しに しぬ しね

のやうに四段活用に變ずる。

四 良行變格活用

有ら あり ある あれ
動詞の語尾が良行の第一・第二・第三・第四の四段に互つて活用するは四段活用と同じいが、第二段で言ひ切るのが異なつてゐる。之を良行變格活用といふ。此の動詞には「有り」居り 侍りの三語がある。

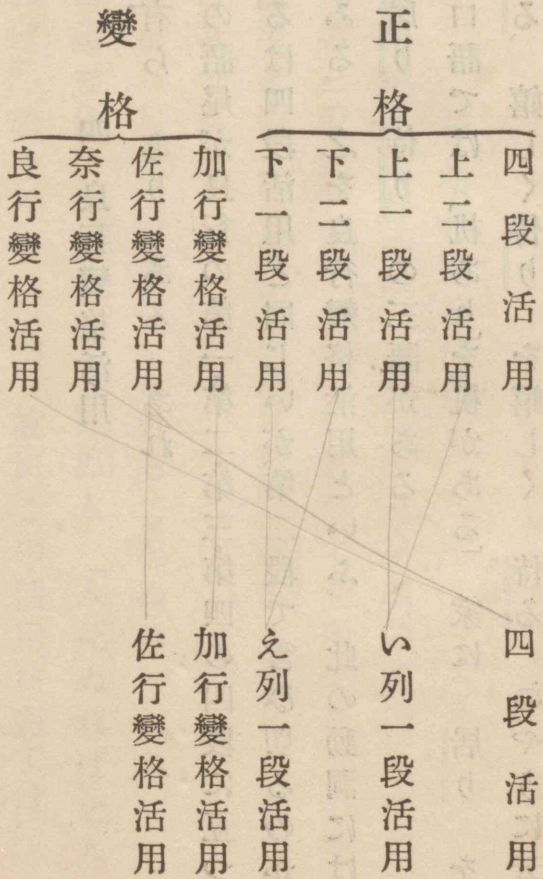
但、口語では「机あり」を「机がある」家に 居り を家に 居る、嬉しく侍り を嬉しく 侍る のやうに云ふ。故に此の活用も、口語では四段活用に變ずる。以上四種の活用を變格活用と總稱する。變格活用の語は、正格活用に比すれば、遙に少い。

變格活用

動詞の正格變格兩活用を合すれば、九種あるが、口語では、五種となる。之を比較すれば左のやうである。

（文語動詞）

（口語動詞）



（注意）四段活用に屬する動詞は最も多く、下二段上二段はこれに次ぐ。口語動

詞の活用は文語に比すれば簡便となる傾きがある。

練習

- 一 動詞の種類を問ふ。
- 二 正格活用と變格活用との區別如何。
- 三 文語動詞と口語動詞とを比較せよ。
- 四 左の文中縦線を施したる動詞の活用を擧げよ。
 - (イ) 現世を愛し、人生生活を樂しむ。
 - (ロ) 膽力天地を吞むとはこの事であらう。(口語)
 - (ハ) 比叡あるしは、今も來りて苔むす石の面を拂ふ。
 - (ニ) 飢うれば氈毛を雪に和し、いのちを繋ぐ料となす。
 - (ホ) 衣服は忽ち濕ひ、萬雷の一時に轟くかと疑はる。(口語)
 - (ヘ) 打向ふたびに心を磨けとや、鏡は神の作りそめけむ。
- 五 左の文につきて動詞を指摘し、且その活用の種類を區別せよ。
 - (イ) 過ちは速に改むべし。

- (ロ) 昨日は晴れたが今日は曇つた。(口語)
- (ハ) 水上に浮ぶものは、水よりも軽い。(口語)
- (ニ) 世の進むに従ひて分業行はる。
- (ホ) 残れる暑さ漸く去りて、吹く風涼しき時節となれり。

一 四段活用

- 一 アイウエの四段に活用する。
- 二 カサタハマヤラの六行。
- 三 口語文語活用同じい。

二 良行變格活用

- 一 所屬の動詞は有り居り待りの三語。言ひ切る。
- 二 口語は其の活用四段活用に同じい。
- 三 アイウエの四段に活用する(ウ段に^レを添へる)。

三 奈行變格活用

- 一 所屬の動詞は死ぬ往ぬの二語。
- 二 口語は其の活用四段活用に同じい。

動詞摘要

四 上一段活用

- 一 イの一段に活用する。
- 二 カナハマヤラの六行。
- 三 口語はその活用文語と同じい。

五 上二段活用

- 一 イウの二段に活用する。
- 二 カタハマヤラの六行。
- 三 口語はその活用上一段活用に同じい。

六 下一段活用

- 一 エの一段に活用する。
- 二 所屬の動詞は蹴るの一語。
- 三 口語は文語と同じい。

七 下二段活用

- 一 エウの二段に活用する。
- 二 アカサタナハマヤラの十行。
- 三 口語はその活用下一段活用に同じい。

八 加行變格活用

- 一 イウオの三段に活用する。
- 二 所屬の動詞は來の一語。
- 三 口語はルで言ひ切る。

九 佐行變格活用

- 一 イウエの三段に活用する。
- 二 所屬の動詞は爲御座（イ）の二語。
- 三 口語はルで言ひ切る。

イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ	サ	シ	ス	セ	ソ	タ	チ	ツ	テ	ト	ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ	ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ	マ	ミ	ム	メ	モ	ヤ	ユ	ユ	ヨ	ラ	リ	ル	レ	ロ
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

第四章 音便

音便

清き水 を 清い水
 早く行け を 早う行け
 家富みて を 家富んで
 物を賣りてを 物を賣つて

などのやうに、形容詞・動詞の語尾を、發音の便宜上他音に呼び換へ、假名をも書き變へることがある。これを音便といふ。音便には左の種類がある。

一 い音便

(動)

説きて…説いて
 仰ぎて…仰いで

(形)

高し…高い
 嬉しき…嬉しい

指して…指いて。

△きぎし…い。

二 う音便

(動)

争ひて…争うて。

讀まむ…讀まう。

△ひむ…う。

△しき…い。

(形)

善く…善う。

涼しく…涼しう。

△く…う。

三 撥音便

(動)

死にて…死んで。

喜びて…喜んで。

富みて…富んで。

△にびみ…ん。

(形)

重くす…重んず。

△く…ん。

四 促音便

(動)

打ちて…打つて。

買ひて…買つて。

語りて…語つて。

△ちひり…つ。

(形)

(缺)

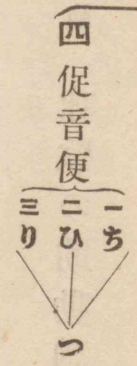
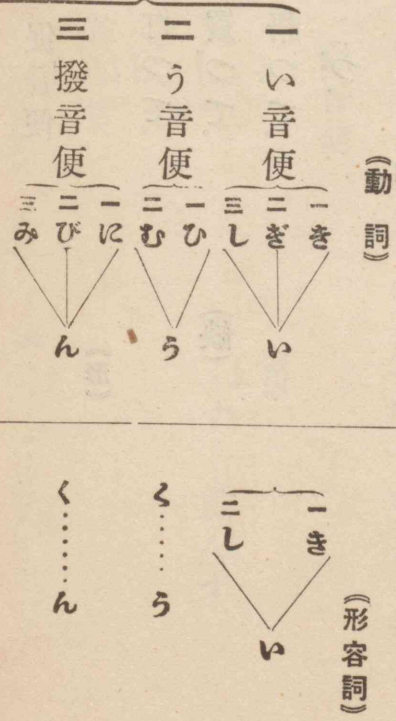
(注意) 口語の 説いた 言うた 喜んだ 買った など皆音便である。又四時をしいじ、夫子をふうし、文字をもんじ、無くばを無くんば、もはらをもつばら など、いうんつを添へることがある。これまた一種の音便である。

練習

- 一 形容詞の音便に幾種あるか。
- 二 動詞の音便に幾種あるか。
- 三 左の文章に誤あらば正せ。

- (イ) 先生に請ふて朗讀せり。
- (ロ) 東京は甚だ賑はしひ都である。(口語)
- (ハ) これでよろしひと仰せられた。口語
- (ニ) 徒に時間を費すことがなひ。(口語)
- (ホ) 四國に近ひ所が鳴門海峡である。(口語)
- (ヘ) 仰ひで天の高きを見る。(口語)
- (ト) 老婆は細ひ燈の下で絲を續いだり小車を繰つたりしてゐる(口語)

音便摘要



〇

第五章 助動詞の種類及び活用

助動詞は活用の形式からいへば、動詞やうのもの、形容詞やうのもの、及特殊活用をなすものがある。又意義の上からいへば、指定・咏歎・希望・比況・推量・打消・時受・身可能・使役・敬語の十一種がある。左に示すものは其の意義上の種類である。

第一節 指定の助動詞

余はかく信ずるなり。
かれは性質よろしき人なり。

指定の助動詞

正行の父は正成なり。
父は父たり。子は子たり。
右のやうに なり たり は事物・動作等を指定する語であるから、指定の助動詞といふ。左のやうに活用する。

なら なり なる なれ
たら たり たる たれ

〔注意〕 口語の指定は、見るのだです。正成だです。のやうにだですを用ひる。但だですの動詞形容詞に添ふ場合には、見るのです(のだ) 善いのです(のだ)のやうに、中間にのをおく。だですの活用左のやうである。

見る(で)せ (で)し (で)す
父 だ(ら) (で) だ(つ) (だ)

第二節 咏歎の助動詞

秋の野に人待つ蟲の聲すなり。
朝けの風は秋を告ぐなり。

右の なり は咏歎の意を示すから咏歎の助動詞といふ。
左のやうに活用する。
なり なる なれ

〔注意〕 口語では聲がするわ(い)よ(の)やうにいふ。

第三節 希望の助動詞

をりく運動したし。
御出で下されたし。

右のやうに、たし は希望を表す。故に、希望の助動詞といふ。
左のやうに活用する。
たく たし たき たけれ

希望の助動詞

〔注意〕 口語では、運動したいのやうに、たい を用ひる。その活用左のやうである。

たく たい たけれ

又たくは、動詞あると結び附いてたかるとなる。

勉強したからう。勉強したかつた。

第四節 比況の助動詞

恰も見るが如し。 甲は乙の如し。

比況の助動詞

右の 如し は、事物を比較説明する意を示す。故に比況の助動詞といふ。左のやうに活用する。

ごとく ごとし ごとき

〔注意〕 この助動詞は、がの下に添ふことがある。

動かざること山の如し。恰も見るが如し。

口語ではやうだを用ひる。

練習

- 一 指定の助動詞とは何か。
- 二 咏歎の助動詞とは何か。
- 三 希望の助動詞とは何か。
- 四 比況の助動詞とは何か。
- 五 左の文中より指定咏歎希望比況の助動詞を指摘せよ。

(イ) 御來車下されたし。

(ロ) 勉強は幸福の母である。(口語)

(ハ) 大丈夫たるもの素志を屈すべからず。

(ニ) 玉のやうな白露が見える。(口語)

(ホ) 過ぎたるは猶及ばざるが如し。

(ヘ) かれの成績は級中第一たり。

(ト) これ生徒の本分なり。

(チ) 秋風に初雁ぞ聞ゆなる。

第五節 推量の助動詞

推量の助動詞

花 咲く
べし らし らむ めり

雨 降ら
まし むん

雨 降りけむ

右のやうに べし らむ らし めり む まし けむ
は事物を推量する意を示す。故に推量の助動詞といふ。
但、む は未来、けむ は過去を推量するとき、べし
は指定や可能にも用ひられる。又 べし と あり

とは結び附いて べかり となる。
これ等助動詞は左のやうに活用する。

べく べし べき べけれ
べから べかり べかる べけれ
らむ らめ
らし (活用せず)
めり める めれ
む め
まし ましか
けむ けめ

〔注意〕 らしは口語らしいにあたる。その活用は左のやうである。
らしく らしい らしけれ
けむは口語たらうにあたる。

第六節 打消の助動詞

書を讀ま^じず

花咲く…まじ

打消の助動詞

右のやうに ず^じ まじ^じ は、打消の意を示す。故に打消の助動詞といふ。

但、^じまじ^じ は推量して打消す意がある。

ず^じ は あり と結び附いて ざり^じ となる。

ず^じ まじ^じ は左のやうに活用する。

ず^じぬ^じね^じ

ざら^じざり^じざる^じざれ^じ

じ^じ (活用せず)

まじく^じ まじ^じ まじき^じ まじけれ^じ

(注意) 口語の打消にはないぬまいを用ひる。その活用は左のやうである。

なく^じ ない^じ なけれ^じ

ず^じぬ^じね^じ

まい^じ。(活用せず)

練習

一 推量の助動詞を説明せよ。

二 打消の助動詞を説明せよ。

三 口語の打消推量の助動詞を挙げよ。

四 左の文中より推量・打消の助動詞を摘出せよ。

(イ) 明日御登校の際、御誘ひ下さるまいか。(口語)

(ロ) 君はまだ遠くは行かじ、我が袖の袂の涙かわきはてねば。

(ハ) これ實に巍然たる大丈夫ならずや。

(ニ) 色こそ見えね香やは隠るゝ。

- (ホ) あはれ、今年の秋も往ぬめり。
- (ヘ) 今日こそ祝ふべき日である。(口語)
- (ト) いかになりたりけむ、其の終りを知らず。

第七節 時の助動詞

友を訪ひ
 つぬたり

友を訪へ…り

右のやうに つぬたり
 故に完了の助動詞といふ。左のやうに活用する。

て つ つる つれ
 なに ぬぬる ぬれ ね

完了の助動詞

たら たり たる たれ
 らり るれ

(注意) □の中にあるのは古い活用である。

口語では 友を訪うた 書を読んだ のやうにただを用ひる。その活用左のやうである。

たら たれ
 だら だれ

友を訪ひ
 きけり

右のやうに きけり
 の助動詞といふ。左のやうに活用する。

きし
 けら けり ける けれ

過去の助動詞

未來の助動詞

〔注意〕 □の中にあるのは古い活用を示す。
口語では 友を訪うた 書を讀んだ のやうにただを用ひること、完了にただを用ひると同じ。

明日は友を訪はむ。

右のやうに む は動作の未來を示す。 故に未來の助動詞といふ、左のやうに活用する。

む(ん) め

〔注意〕 口語では、友を訪はう 早く起きよう のやうにうようを用ひる。うようは何れも活用しない。

練習

- 一時の助動詞とは何か。
- 二時の助動詞の文語と口語とを比較せよ。
- 三左の文中より時の助動詞を指摘し、その種類及び活用を示せ。
- (イ) かれは勉強せし結果、今日の位置に進みたり。

受身の助動詞

- (ロ) 春季の遠足は誠に愉快であつた。(口語)
- (ハ) 我が父母嘗て東京に住みけると、余は僅かに三歳なりき。
- (ニ) かれが少しく反省したら、かやうな逆境には陥るまいものを(口語)
- (ホ) 今日晝を習つた後で、一時間の散歩をした。(口語)
- (ヘ) 大雨俄に降り出でたれば急ぎて家に歸れり。

第八節 受身の助動詞

犬に追はる。

道を教へらる。

右のやうに る らる は動作を他より受ける意を示す。故に受身の助動詞といふ。左のやうに活用する。

れ る る、 るれ
られ らる らるる らるれ

〔注意〕 口語では、れるられるを用ひる。その活用は左のやうである。
れれる
られられる

第九節 可能の助動詞

一日に十里の道は歩まる。

十分に注意すれば其の事必ず達せらる。

右の するは、動作の自ら能くし得られる意を示す。

故に可能の助動詞といふ。その活用は、文語・口語共に受動

の するに同じい。

〔注意〕 一時間にて達すべし のやうに、べしを可能に用ひることもある。

第十節 使役の助動詞

可能の助動詞

弟に燈火を持たしむ

子弟に教育を受けしむ

右のやうに するは、他を使役して動作を起

させる意を表す。故に使役の助動詞といふ。左のやうに

活用する。

せす する すれ

させ さす さする さすれ

しめ しむ しむる しむれ

〔注意〕 口語では、持たせる 受けさせる のやうに、せるさせるを用ひる。

その活用は左のやうである。

せせる せれ

使役の助動詞

させ させる させれ

第十一節 敬語の助動詞

父は今手紙を書かる。

校長他縣へ出張せらる。

皇太子殿下逗子に成らせらる。

皇后陛下、聾啞學校に行啓せさせ給ふ。

勅語を内閣總理大臣に授けしめ給ふ。

敬語の助動詞

右の せる は、受身可能の せる に同じく
せさせ しめ は、使役の せさせ しめ に同じで、
共に他の動作を敬ふ意に用ひられる。故に敬語の助動詞
といふ。給ふ 侍り などは、動詞の轉じて敬語の助動詞
となつたものである。又同じ敬語の中でも、他を敬つて言

ふ場合と、自ら謙つて言ふ場合とがある。但しめは古文に
多く用ひられる。

〔注意〕 口語ではるはれるとなり、らるはられるとなる。その活用は受身のれる
られるに同じい。

右の外、敬語の助動詞にますといふ語がある。その活用は左のやうである。
ませ まし ます(まする) ますれ

練習

- 一 受身の助動詞とは何か。
- 二 可能の助動詞とは何か。
- 三 使役の助動詞とは何か。
- 四 敬語の助動詞とは何か。
- 五 右の四助動詞の文語と口語との活用を問ふ。
- 六 左の文中、可能、受身、使役と敬語との助動詞を指示し且、口語なる
は文語に改むべし。

- (イ) 大臣に仰せて賢才を擧げさせ給ふ。
- (ロ) これは殿下の植ゑさせ給ひし松なり。
- (ハ) 旅客は切符を改めらるべし。
- (ニ) 山と水とに送られてもと來し路に歸る。
- (ホ) 兄は弟に復習をさせ、姉は妹に庭を掃かせる。(口語)
- (ヘ) 天帝が道具に使はれた特製の役者である。(口語)
- (ト) 盛衰は今に始めぬわざに侍れども、ことさら心驚かれにき。

〔種類〕〔助動詞〕

- 一指 定 なり たり
- 二咏 歎 なり
- 三希 望 たし
- 四比 況 ごとし べし

〔活用の形〕

- | | | | |
|-----|-----|-----|-----|
| なら | なり | なる | なれ |
| たら | たり | たる | たれ |
| なく | たし | たき | たけれ |
| ごとく | ごとし | ごとき | |
| べく | べし | べき | べけれ |

助動詞 摘要

七時		六打消		五推量	
けり	きり	たり	ぬ	つ	まじ
過去		完了			
けら	きり	たり	ぬ	つ	まじ
けり	きり	たり	ぬ	つ	まじ
ける	し	る	たる	ぬる	つる
けれ	しか	れ	たれ	ぬれ	つれ
					まじけれ
					まじ
					じ
					ず
					けむ
					まし
					む
					めり
					らし
					らむ
					らめ
					め
					めれ
					めしか
					けめ
					ね
					まじけれ

十一敬語 (受身可能使役に同じい)	十使役	九可能	八受身	む…未來
しむ	さす	する	れる	む
しめ	させ	せ	られ	る
しむ	さす	す	らる	る
しむる	さする	する	らるゝ	るゝ
しむれ	さすれ	すれ	らるれ	るれ

第六章 形容詞・動詞・助動詞の活用形

第一節 形容詞の活用形

く	く	く	く	し	し	し	き	し	き	けれ	しけれ
山、高くば寒からむ。	遊び、楽しくとも耽らじ。	山、高く峙つ。山高く、水清し。	余は楽しく遊べり。	山、高し。	運動は樂し。	山、高き地方あり。	樂しき事業なり。	山、高ければ水清し。	心樂しければ業成りやすし。		
未然形	連用形	連用形	連用形	終止形	終止形	連體形	連體形	連體形	連體形	已然形	已然形

未然形

右のやうに第一段は、物事の未定又は假定をいふに用ひられるから未然形といふ。ばども などの助詞が結びつく。但、口語では、山 高くばを 山 高ければ のやうにいふ。

連用形

第二段は多く用言に連ねて用ひられるから連用形といふ。又副詞として用ひられるから副詞形ともいふ。「山高く、水清し」の 高く のやうに中止形をなす場合もある。

(副詞形)

但、口語では く を う と言ふことが多い。

終止形

第三段は物事の終結する意を表すものであるから終止形といふ。この段は活用形の本體である。

但、口語では 高し を 高い、 樂し を 楽しい のやうにいふ。

連體形

第四段は多く體言に連なる場合に用ひられるから連體形

已然形

といふ。連體形には なり を が 等の助詞が結びつく。第五段は物事の確定又は既定の條件を表すに用ひられるから已然形といふ。已然形には ばども 等の助詞が結びつく。

但、口語では已然形と未然形が同形になつてゐる。

(注意) 活用形は、又活用段とも稱す。而してその何形といふことは、その用ひ方の一部について、便宜上、與へた名稱である。

形容詞活用表 (平假名は文語、片假名は口語)

活用	語根	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
久活用	高	く (ウ)	く (ウ)	し イ	き イ	けれ ケレ
志久活用	樂	しく シク(シウ)	しく シク(シウ)	し シイ	しき シイ	しけれ シケレ

練習

- 一 形容詞の活用形を説明せよ。
- 二 左の文につきて形容詞を指摘し、かつその活用形を示せ。
 - (イ) 孝心深き人は、すべての人に對してもよき友人なり。
 - (ロ) 水清ければ、魚すまず。
 - (ハ) 善さを取り、悪しきを捨つ。
 - (ニ) 志堅く、行正しき人こそ頼もしけれ。
 - (ホ) 長く住めば都會の生活は苦勞も多く、不愉快も少くない。(口語)
 - (ヘ) 身分が賤しいけれども行狀が正しい。(口語)

第二節 動詞の活用形

ま 書を讀まば知識を増さむ。 未然形
 み 書を讀み始む。 書を讀み字を習ふ。 連用形
 文字の讀みを學ぶ。

未然形
連用形

讀む

む 書を讀む。 終止形
 む 讀む書。 連體形
 め 書を讀めば知識を増す。 已然形
 め 怠らずして書を讀め。 命令形

右のやうに動詞の活用形は、六種あつて、形容詞に比すれば、命令形一種を増してゐる。命令形は、命令希望又は禁止などの意を表はす。

動詞の未然形から、ば、の外に、ずじまし、や、るらる、すさすしむむ、などの動詞が結びつく、
 口語では打消の助動詞 ないん、や、未來の助動詞 う、よう、が結びつく。
 動詞の連用形から、つぬたりけりき、や、てつつ、などの助動詞にも結びつく。「書を讀み、字を習ふ」の讀み

(中止形)
(名詞形)

は中止形で、「文字の 読み を學ぶ」の 読みは名詞形であるが、おしなべて此の段を連用形といふ。四段活用の連用形に助詞 て が結びついて「咲きてを咲いて」、「戦ひてを戦うて」、「断ちてを断つて」、「飛びてを飛んで」のやうに種々の音便を表す。

終止形

動詞の終止形には、べし・まじらむ・めりらしなり (咏歎) などの助動詞の外、とともや などの助詞が結びつく。

連體形

動詞の連體形には、なり(指定)・ごとし の助動詞や、かが 等の助詞が結びつく。口語では「朝早く起きる」、「朝早く起きる人」のやうに、終止形と連體形とは同一である。

已然形

動詞の已然形には、ばども 等の助詞が結びつく。口語では書を 読めば 知識を増せり、「書を 読めば 知識を増す」のやうに、未然形と已然形とは同一である。

命令形

四段活用・良行變格活用・奈行變格活用は、讀め 有れ 死ぬ のやうに、え 列の音で命令になり、其の他の動詞は已然形に よ が結びついて命令になる。口語では四段活用は え 列、加行變格活用は、來い、佐行變格活用は、せよ、しるで命令になり、其の他の動詞は未然形に よ 又はろ が結びついて命令になる。

但、形容動詞は良行變格活用と同様の活用をなしてゐるから、他の形容詞と違ひ命令形を有する。

形容動詞活用表

語根	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
善	から	かり	かり	かる	かれ	かれ
明瞭	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ

(注意)前例四段活用 of 動詞は、終止形と連體形と語形相同じく、又已然形と命令形と同語形なるが、各形共異なる語形のものもある。其の他委しくは別表に記載してある。

練習

一 動詞の活用形を説明せよ。

二 口語と文語と同形なる活用を問ふ。

三 口語と文語と異形なる活用を問ふ。

四 左の文につきて、動詞の活用形を指示せよ。

- (イ) 十年の計は、木を植うるにあり。
- (ロ) 學生たるものは宜しく勤勉努力して、初志を貫くべし。
- (ハ) 西瓜太郎躍り出でよと割りてけり。
- (ニ) 教育勅語と戊申詔書とは、我等に身を修め、世に處するの道を教へ給へるものである。(口語)

下 一 段	上 一 段	下 二 段	上 二 段	
(蹴)	(見)	受	起	
ケ け	ミ み	ケ け	キ き	シ
ケ け	ミ み	ケ け	キ き	シ
ケ け ル ル	ミ み ル ル	ケ け ル ル	キ け ル ル	フ ル
ケ け ル ル	ミ み ル ル	ケ け ル ル	キ け ル ル	フ ル
ケ け レ レ	ミ み レ レ	ケ け レ レ	キ け レ レ	ス レ
ケケけ ロイよ	ミミみ ロイよ	ケケけ ロイよ	キキき ロイよ	シ ロ
口 文 語 語 下 下 同 一 上 段	口 文 語 語 上 上 同 一 上 段	口 文 語 語 下 下 一 二 段 段	口 文 語 語 上 上 一 二 段 段	口 語 同 上

(注意) 四段奈變、良變の命令形にはよを添へないが、他の命令形には之を添へる。口語の動詞は終止形と連體形と同形である。

動詞活用表 (右方の平假名は文語、左方の片假名は口語)

活用	四段	良行變格	奈行變格	加行變格	佐行變格	上二段	下二段	上一段	下一段
語根	讀	有	死	(來)	(爲)	起	受	(見)	(蹴)
未然形	マ	ラ	ナ	コ	シ	キ	ケ	ミ	ケ
連用形	ミ	リ	ニ	キ	シ	キ	ケ	ミ	ケ
終止形	ム	ル	ヌ	ク	ス	キ	ケ	ミ	ケ
連體形	ム	ル	ヌ	ク	ス	キ	ケ	ミ	ケ
已然形	メ	レ	ネ	ク	ス	キ	ケ	ミ	ケ
命令形	メ	レ	ネ	コ	シ	キ	ケ	ミ	ケ
備考	口文 語語 同四上段	口文 語語 良行 同四上段	口文 語語 奈行 同四上段	口文 語語 加行 同四上段	口文 語語 佐行 同四上段	口文 語語 上二 同四上段	口文 語語 下二 同四上段	口文 語語 上一 同四上段	口文 語語 下一 同四上段

(注意) 四段奈變、良變の命令形にはよを添へないが他の命令形には之を添へる。口語の動詞は終止形と連體形と同形である。

動詞活用表

動詞	原形	未然形	連用形	終止形	終止形	敬体形	命令形	假定形	推定形	過去形	過去助動詞	態助動詞	使役形	使役助動詞	使役使役助動詞	使役使役助動詞	使役使役助動詞	使役使役助動詞	使役使役助動詞	使役使役助動詞	
有	有	有ら	有らし	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
死	死	死な	死な	死	死	死	死	死	死	死	死	死	死	死	死	死	死	死	死	死	死
來	來	來	來	來	來	來	來	來	來	來	來	來	來	來	來	來	來	來	來	來	來

(ホ) 富國の實の擧ると擧らないとは我が商人の信用勤勉機敏の如何に存する。(口語)

(ヘ) 老人長者の爲に道をゆづり、幼者不具者の爲に席を與へるなどは個人としても國民としても、其の心の奥ゆかしさが感ぜられる。(口語)

(ト) 進取の氣象に富める人は、何事を爲すにも、この事は必ず成るべしと覺悟して、熱心にその事に従ふをもて成功は期せずして得らる。

第三節 助動詞の活用形

助動詞も亦、活用形六種を有する。今使役の助動詞「しむ」につきて、その語形を示さう。

しめ 弟に勉強せしめむ 未然形
しめ 弟に勉強せしめたり 連用形

動詞に似た助動詞

しむ

弟に勉強せしむ

終止形

しむる

弟に勉強せしむる兄あり

連體形

しむれ

弟に勉強せしむれば嬉し

已然形

しめよ

弟に勉強せしめよ

命令形

右の如く助動詞も、未然形連用形終止形連體形已然形命令形の六種を有する。されども、その種類によつて、その活用形の缺けたものがある。例へば可能の命令形を缺き、過去のき の未然形連用形命令形を缺けるの類である。

活用形が動詞に似た助動詞

下二段活用

受身(る)らる(可能)る(使役)す(さ)す(し)

む(完了)つ(推量)けむ

良行變格

指定(なり)たり(推量)めり(完了)たり(り)過

去(けり)

形容詞に似た助動詞

奈行變格

完了(ぬ)

活用形が形容詞に似た助動詞

久活

希望(た)し(比況)ごとし(推量)べし

志久活

打消(ま)じ

特殊の活用をなす助動詞

推量(ら)む(まし)打消(じ)過去(き)未來(む)

右のやうに助動詞の活用は動詞や形容詞に準じて知ることが出来る。又口語の助動詞も、動詞の下一段活用四段活用に似たもの、形容詞の活用に似たもの、特殊の活用をなすものがある。

練習

左の文中より助動詞を挙げ、その活用形を示せ。

一金剛石も磨かずば、玉の光は添はざらむ。

二 頼山陽の文を見れば、その熱情の溢れたる、その文勢の壯なる、驚くべきもの甚多し。

三 嘗て博物を學びし時、蟲探董の話聞きて、興味いと深かりき。

四 吁富士といはず、天龍といはず、一葉の船、一本の棹で越されぬ河流は何處にあらうか。(口語)

五 「武藏野は刈萱のみと思ひしに、かかる言葉の花も咲きけり」と、御製さへ賜ひて、賞讃せさせ給ひけり。

六 風雅の嗜こそ、何人にもあり得べくして、又何人にも有りたいたいものである。(口語)

七 彼の大日本史は實に徳川光圀卿の監修せられたりしものなり。

八 「農は人の職業中最も健全、最も高貴にして、又最も有益なるものなり」といへるワシントンの言味ふべし。

完	打	推	比	希	咏	指	種類	
							活用形	未然形
ぬつ	消 まじ(ヌ)ナず イジ(ン)イ	量 ま け ヨ ウ む ら ラ ら め べ し ラ ム ウ ム シ り し ウ	況 ヤ ぐ ウ と ダ し	望 タ た イ し	歎 な り	定 ダ デ た な ス り り	活用形	未然形
なて	ま じ く ズ ナ ず ク	ラ シ ク	ヤ ぐ ウ と ナ く	タ た ク く		ダ デ た な ラ セ ら ら	連用形	終止形
にて	ま じ く ズ ナ ず ク	ラ シ ク	ヤ ぐ ウ と ニ く	タ た ク く		デ デ た な シ り り	終止形	連體形
ぬつ	ま じ (ヌ) ナ ず イ ジ (ン) イ	ま け ヨ ウ む ら ラ ら め べ し ラ ム ウ ム シ り し ウ	ヤ ぐ ウ と ダ し	タ た イ し	な り	ダ デ た な ス り り	連體形	已然形
ぬつ るる	ま じ (ヌ) ナ ぬ じ き (ン) イ	ま け ム ら ラ ら め べ し ム ゠ シ り る き ウ	ヤ ぐ ウ と ナ き	タ た イ き		ダ デ た る ス る る	已然形	命令形
ぬつ れれ	ま じ け れ ネ ナ ね ケ レ	ま け め ら ラ ら め べ し か め ゠ シ ケ レ ウ	ヤ ぐ ウ ナ レ	タ た ケ れ		た な れ れ	命令形	動詞との比較
ねて よ						た な れ れ	動詞との比較	
奈下	○形特(形)特	同(特)下○○同特(形)○良形	同形	同形		同(特)同良	動詞との比較	
變二	容殊(容)殊	殊二 殊容(變)容	容	容		殊 變	動詞との比較	

助動詞活用表

(右方の平假名は文語
左方の片假名は口語)

〔注意〕 助動詞によりては活用形の二三を缺くものがある。

敬	使	可	受	時			打	推	
				來未	去過	了完			
讓	役	能	身				消	量	
マサスララレル ススレるル	シササセル ムセル	ララレル レルル	ララレル レルル	ヨウむ ウ	タけさ り	タリたぬつ り	マまじヌナ イジ(ン)イ	まタけヨウむ シラウ	ララめべ ラシりし
マサセララレ セセレれ	シササセセ めセせ	ララレれ レれ	ララレれ レれ		タけ ラ	タラたなて ら	まズナ じク		ラベ シク
マサセララレ シセレれ	シササセセ めセせ	ララレれ レれ	ララレれ レれ		テけ り	テリたにて り	まズナ じク		ラめべ シク
マサスララレル ススレるル	シササセル ムセル	ララレル レルル	ララレル レルル	ヨウむ ウ	タけさ り	タリたぬつ り	マまじヌナ イジ(ン)イ	まタけヨウむ シラウ	ララめべ ラシりし
マサスララレル ススレるル	シササセル ムセル	ララレル レルル	ララレル レルル	む	タけし る	タるたぬつ るるる	まじヌナ じき(ン)イ	まけむ シ	ララめべ ラシりし
マサスララレル ススレるレ	シササセル ムセル	ララレル レルレ	ララレル レルレ	め	けし れか	れたぬつ れれれ	まじネナ しけれケレ	まけめ シか	ララめべ ラシりし
マサセララレ セセヨヨ	シササセセ めセせヨヨ		ララレれ レれヨヨ			ねて よ			
特下下下下下	下下下下下	下下下下	下下下下	〇〇特	四良特	四同良奈下	〇形特形特	同特下〇〇同特形〇良形	
殊二二二二二	二二二二二	二二二二	二二二二	殊	段變殊	段變變二	容殊容殊	殊二 殊容 變容	

助動詞活用表

(右方の平假名は文語
左方の片假名は口語)

種類	指				希	咏	比	推
	定							
活用形	なり	たり	なり	なり	なり	なり	なり	なり
未然形	なら	たら	なら	なら	た	た	た	た
連用形	なり	たり	なり	なり	た	た	た	た
終止形	なり	たり	なり	なり	た	た	た	た
連體形	なる	たる	なる	なる	た	た	た	た
已然形	なれ	たれ	なれ	なれ	た	た	た	た
命令形	なれ	たれ	なれ	なれ	た	た	た	た
動詞との比較	良	同	特	同	同	同	同	同
	變	殊	容	變	容	容	容	容

第七章 用言相互の連続

第一節 動詞と助動詞との連続

書を讀ましむ。
書を習ひたり。
字を寫すべし。
早く起くるなり。
家富めり。

右の文を見るに、しむは動詞の未然形、讀まに連なり、たりは動詞の連用形、習ひに連なり、べしは動詞の終止形、寫すに連なり、なりは動詞の已然形、富めに連なり、起くるに連なり、りは動詞の已然形、富めに連なり。かく動詞と助動詞と連續するには、一定の法則があつ

未然形に連なる助動詞

て亂れない。

動詞の未然形に連なる助動詞は、むずざりじしむまし
の外に、四段良變奈變の三活用には、るす が連なり、其の
他の活用には、らるさす が連なる。又加變には來し來
しか のやうに、時の助動詞の ししか が連なるが、き
が續かない。又佐變には、ししか の外に爲り のやう
に、り が連なる。

但、佐變の「出發せらる」、「評せらる」といふべきを「出發さ
る」、「評さる」などといふことは現代文では許容されて
ある。

連用形に連なる助動詞

動詞の連用形には、きけりつぬたりけむたし が連るが、
此の外に奈變「死」にはぬ、加變「來」にはき、佐變「爲」には
ししか が續かない異例がある。

未然形に連なる助動詞

動詞の終止形には良變「有」を除くの外、らむらしめりべ
しべかりまじなり(咏歎)が連なる。

連體形に連なる助動詞

動詞の連體形には一般に、なり(指定)ごとし が連なり、良
變には更に他の動詞の終止形と同様に、らむらしめりべ
しべかりまじなり(咏歎)が結びつく。

以上の外、四段活用の已然形に「讀めり」、「咲けり」などのやう
に、りが連なる。り は佐變の未然形と四段の已然形
とのみに續く規定であるが「隔てり」、「受けり」などのやうに誤
ることもある。

〔注意〕 動詞の活用形によつてこれに連なる助動詞は略々一定してゐるが異例

のものも少くはない。別表を見ればその區別が明かに知られる。

練習

- 一 動詞の未然形に連なる助動詞は何々か。
- 二 動詞の連用形に連なる助動詞は何々か。
- 三 動詞の終止形に連なる助動詞は何々か。
- 四 動詞の連體形に連なる助動詞は何々か。
- 五 動詞の已然形に連なる助動詞は何々か。
- 六 左の文につき動詞と助動詞との連續を説明せよ。
 - (イ) 彼れは先生に譽められた。(口語)
 - (ロ) 天祐ありてか、かゝる幸運にあへりけり。
 - (ハ) 千古の色を改めざるは此の水と山とあるのみなり。
 - (ニ) 朝な朝な飯食ふごとくに忘れじな、めぐまぬ民に惠まるゝ身は。
 - (ホ) 今迄鼠色に見えた世界が突然四方からばつたり暮れた。(口語)

佐	加
變	變
爲 ^セ	來
り	し
か	し
爲 ^ズ	來
ずは	續
續	かず
か	
爲 ^ス	來
る	來
爲 ^ス	來
れ	來

*なりは咏歎である。ごとしは助詞が添へてがごとしといふことがある。

(乙) 口語之部

佐	加	下	上	四	口語活用
變	變	一段	一段	一段	活用形
爲 ^セ	來 ^コ	受蹴	落似	死有讀	未然
(シ)		け	ち	なら	然
まい	よう	させる	られる	せれる	
		ぬ	ない		
爲 ^ズ	來 ^キ	受蹴	落似	死有讀	連用
		け	ち	にりみ	
	たい	た(だ)	ます		
爲 ^ス	來 ^ル	受蹴	落似	死有讀	終止
る	る	ける	ちる	ぬるむ	
				まい	
		らしい			
爲 ^ス	來 ^ル	受蹴	落似	死有讀	連體
る	る	ける	ちる	ぬるむ	
	や(の)だ	(の)です	でせう	だらう	
	だ				

動詞と助動詞との連続表

〔甲〕 文語之部

文語活用	活用形	四段	良	奈	上一段	上二段	下一段	下二段	加	佐
未然		讀ま	有ら	死な	似	落ち	蹴	受け	來	爲
		する		りか						
		さす								
		しじざむ								
連用		讀み	有り	死に	似	落ち	蹴	受け	來	爲
		續ぬかはず		ずはし續しかか						
		たけたりぬうけき								
終止		讀む	有り	死ぬ	似る	落つ	蹴る	受く	來	爲
		まべべらら じかしむ		なり						
		たけたりぬうけき								
連體		讀む	有る	死ぬ	似る	落つ	蹴る	受く	來	爲
		まべべらら じかしむ								
		ごとし								
已然		讀め	有り	死ぬ	似れ	落つ	蹴れ	受く	來	爲
		り								

*なりは咏歎である。ごとしは助詞が添へてがごとしといふことがある。

〔乙〕 口語之部

口語活用	活用形	四段
未然		讀ま ならま せれるる
連用		讀み にりみ
終止		讀む ぬるむ まい
連體		讀む ぬるむ

動詞と助動詞との連続表
 (甲) 文語之部

文語活用									活用形
佐	加	下	下	上	上	奈	良	四	未然
變	變	二段	一段	二段	一段	變	變	段	
爲 ^キ	來 ^コ	受け	蹴 ^キ	落ち	似 ^ニ	死 ^シ	有 ^ユ	讀 ^ミ	
しりか			し			する			
ささる									
しじざむ									
爲 ^シ	來 ^キ	受け	蹴 ^キ	落ち	似 ^ニ	死 ^シ	有 ^ユ	讀 ^ミ	連用
ずはし	續 ^キ				續 ^キ				
かか	かは				かは				
ず	か				ず				
たしむりぬうけき									
爲 ^ス	來 ^ク	受 ^ク	蹴 ^ル	落 ^ツ	似 ^ル	死 ^ヌ	有 ^リ	讀 ^ム	終止
なり		まじ	べかり	べし	らし	らむ	まべべらら		
							じかしむ		
							り		
爲 ^ス	來 ^ク	受 ^ク	蹴 ^ル	落 ^ツ	似 ^ル	死 ^ヌ	有 ^ル	讀 ^ム	連體
まべべらら									
じかしむ									
り									
ごとし									
なり									
爲 ^レ	來 ^レ	受 ^レ	蹴 ^レ	落 ^レ	似 ^レ	死 ^ヌ	有 ^リ	讀 ^メ	已然
り									

*なりは咏歎である。ごとしは助詞が添へてがごとしといふことがある。

(乙) 口語之部

口語活用					活用形
佐	加	下	上	四	未然
變	變	一段	一段	段	
爲 ^セ	來 ^コ	受 ^ケ	落 ^チ	死 ^シ	
まい		させ		せら	
い		る		る	
ぬ					
ない					
爲 ^シ	來 ^キ	受 ^ケ	落 ^チ	死 ^シ	連用
たい					
た(だ)					
ます					
爲 ^ス	來 ^ク	受 ^ケ	落 ^チ	死 ^シ	終止
る					
まい					
らしい					
爲 ^ス	來 ^ク	受 ^ケ	落 ^チ	死 ^シ	連體
る					
や(の)だ					
(の)です					
でせう					
だらう					

動詞	助動詞	連続	例
下	一	上	下
上	一	上	上
上	二	上	上
上	三	上	上
上	四	上	上
上	五	上	上
上	六	上	上
上	七	上	上
上	八	上	上
上	九	上	上
上	十	上	上
上	十一	上	上
上	十二	上	上
上	十三	上	上
上	十四	上	上
上	十五	上	上
上	十六	上	上
上	十七	上	上
上	十八	上	上
上	十九	上	上
上	二十	上	上
上	二十一	上	上
上	二十二	上	上
上	二十三	上	上
上	二十四	上	上
上	二十五	上	上
上	二十六	上	上
上	二十七	上	上
上	二十八	上	上
上	二十九	上	上
上	三十	上	上

(へ) 春の日なりとも快き事のみ懷に滿つべくはあらず。

七 左の文につき、動詞と助動詞との連續法に誤りあらば正せ。

(イ) 郡制の廢止によりて兩郡合併されたり。

(ロ) 自由に運動することを得せしめらる。

(ハ) 私は早起しし故に時間に餘りがあつた。(口語)

(ニ) 敵を探せしに果して數百人ありき。

(ホ) 明治初年以來、我が國人の海外へ移住ししもの甚だ多かりし。

(ヘ) この品物に手を觸るゝべからず。

(ト) かくくゝと申せしに、それにて差支がないと仰せられた。(口語)

(チ) この恩永久に忘るゝまじ。

第二節 助動詞と助動詞との連續

ほととぎすほととぎすとして明けにけり。

雨降りぬべしとてさわぐ。

右のやうに助動詞は、相接續して動詞の意を補ふことがある。その連續は、大體動詞へ助動詞が接續する法に同じい。例へば前例に於て、けり は、動詞の連用形に連なるから、助動詞 ぬ の連用形 に にも連なり、べし は、動詞の終止形に連なるから、助動詞の ぬ といふ終止形にも連なるの類である。

勉強す 終止形 べし。

勉強せ 未然形 しむ 終止形 べし。

勉強せ 未然形 しめ 未然形 らる 終止形 べし。

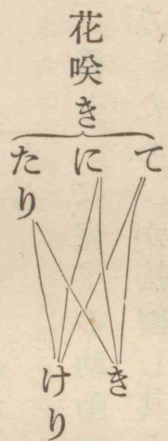
勉強せ 未然形 しめ 未然形 らる 終止形 べき 連體形 なり。

勉強せ 未然形 しめ 未然形 られ 未然形 ざる 連體形 べから 未然形 ず。

右のやうに、助動詞は幾つにも結びついて動詞の意義を完

全に表はさせる。而してその相續は前に述べたやうに、動詞と助動詞との接續法に一致してゐる。助動詞と助動詞との連續中、時の助動詞の相重れるは、特に注意を要するから、その大要を左に述べよう。

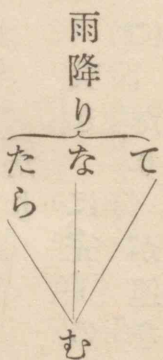
一 完了の助動詞と過去の助動詞



右の 咲き に、完了の助動詞 つ ぬ たり の連用形 て に たり が連なりその下に、過去の き けり を連續させてある。即ち 咲く といふ動作が、既に終つてゐることを表はすから、過去完了といふ。

過去完了

二 完了の助動詞と未來の助動詞



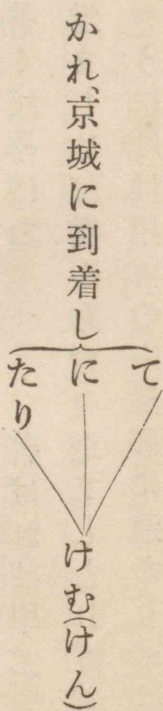
未來完了

右の「降り」に、完了の助動詞「つぬたり」の未然形「なたら」が接続し、其の下に、未來の助動詞「む」を連續させてある。即ち、「降り」といふ動作が、未來に於て完了すべきを表はすから、之を「未來完了」といふ。

〔附〕未來完了は、推量していふ意にも用ひられる。「花既に咲きたらむ」の類である。

完了の助動詞「つぬたり」の連用段「にたり」に過去推量の「けむ」を連ねたものは、過去に於て動作が既に完了し

てゐる意を推量していふに用ひられる。



練習

- 一 助動詞相互の連續法を問ふ。
- 二 過去完了とは何ぞ。
- 三 未來完了とは何ぞ。
- 四 左の文につき、助動詞の連續法を擧げよ。
 - (イ) 口惜しの目やと馬琴は思ひしなるべし。
 - (ロ) 幕府の外國方に擧げられぬ。
 - (ハ) 彼れ、もしこの局に當りたらむには必ずや完全の功を奏するならむ。
 - (ニ) 我が身の別天地にあるを覺えたりき。

(ホ) 凡そ事業の成功は、孜々として勉めて止まざるに在りぬべし。
(ヘ) 今後益、我が國の貿易を盛ならしめむことを勉めざるべからず。

第三節 用言と助詞との連続

第三類の助詞は、ば・ども・に・を・が・て・で・つ・つなどは用言にのみ連続することは既に述べた通りである。今用言の如何なる活用形に結びつくかを見よう。

讀まば讀まれむ。 讀めば讀まる。

善くば學ばむ。 善ければ學ぶ。

進ましめば善からむ。 進ましむれば善し。

右のやうにばは用言の未然形に連なりては假定の意を表し、已然形に連なりては確定の意を表す。

ば

とも

ども

がをに

問ふとも答へじ。 問へども答へず。

駈けしむとも差支なからむ。

駈けしむれども差支なし。

色はよくとも質は悪るからむ。

色はよけれどども質はわるし。

右のやうにともは動詞・助動詞の終止形と形容詞の未然形に結びついて假定の意を表し、どもは用言何れもの已然形に結びついて確定の意を表す。

日暮れかかるにをが宿るべき處なし。

年もゆかぬにをが知多し。

夜は未暗きにをが出立ちぬ。

右のやうにに・を・がは略同様に用言の連體形に結びついて、上の語句と反對な意又は案外な意を下の語句に表す。

て

書を讀みて字を習ふ。
選舉せられて級長となる。
性質善くて勉強す。

右のやうにては用言の連用形に結びつき、前の事が終つて後の事に移る意を表す。

衣帶を解かて看護す。

人に知られでいそしむ。

木陰は暑からで息ふによし。

右のては打消の助動詞ずに前條のてを一語に約めたもので、且つと同様に用言の未然形に連なる。

讀みつつ書く。行きつつ見る。

右のつつは現在完了の助動詞つを重用したもので、且つ讀み且書く、且行き且見るの意を表す。口語ではなが

で

らを用ひる。

此の外第二類の助詞中にも、願望のばやなむ未然形につく、禁止のな(終止形につく)、疑問のや(終止形につく)か連體形につくなどのやうに用言につくものがある。

練習

一 用言に接續する助詞を問ふ。

二 左の文につき助詞の用法に誤りあらば正せ。

(イ) 妄りに進まば敵に攻撃せらる。

(ロ) 春になりたれども花も咲かざらむ。

(ハ) いかなる罪科に行はるともつゆ恨みず。

(ニ) 死すれども退くこと勿れ。

(ホ) 彼を先發せしめば可なり。

三 左の文につき語句を接續する助詞を指示せよ。

(イ) 水すき徹りて、底のさざれ、鱒ふる魚の數もよむべし。

- (ロ) いつの間にか積りし今朝の雪ならむ曉までは月も見えしを。
- (ハ) 昨日記憶したが今日は既に忘れた。(口語)
- (ニ) 一たび郷關を出れば堪へがたい望郷の念に打たれる。(口語)
- (ホ) 彼の手腕を以てすとも成功せざらん。
- (ヘ) 鏡は一物を蓄へず私の心なくして萬象を照らすに、是非善惡の姿現れずといふことなし。

第八章 單語の構成

第一節 熟語・疊語・接頭語・接尾語

熟語 品詞の中には春風の如く、その構造の單純なものと春風の如く、複雑なものがある。その複雑なものを熟語といふ。谷川細長し、賣捌などの類である。又、熟語であつて人々軽々し、思ひくなどのやうに、同一の語を重ねたものがある。之を疊語といふ。又、み吉野、さ苗、初春、諸人、などのみ、さ、初、諸、のやうにある語の上に添へる接頭語、或は私ども、嬉しげ、のども、げ、のやうに、ある語の下に添へる接尾語と稱するものもある。單語は此くの如く種々の形式で成立つものである。今左に、是等諸語の大略を説かう。

疊語
接頭語
接尾語

一 熟語

熟語は、二個以上の單語の結合して、一語を成せるものである。その重なるものを左に擧げよう。

一、熟語の名詞
船歌。近道。遠山。読み書き。朝起き。等。

二、熟語の動詞
物語る。近寄る。追ひかく。取り寄す。請取る。等。

三、熟語の形容詞
胸悪し。畏れ多し。心細し。薄暗し。物憂し。等。

四、熟語の副詞
茫茫として。果して。妄に。俄にし。欲しい(欲しきの音便まゝに)いづくん(に)の音便ぞ。等。

五、熟語の接續詞
故に。いへども。なかに(に)の音便づく。しかのみならず。等。

二 疊語

疊語は、同語を重用する熟語である。その重なるものを左に擧げよう。

一、疊語の名詞
國々。木々。津々。浦々。島々。等。

二、疊語の代名詞
われ。たれ。これ。それ。な。どこ。等。

三、疊語の形容詞
花々し。神々し。重々し。遠々し。馴れ。忌々し。等。

四、疊語の副詞
折々。時々。近々。久々。よく。又々。なほ。徐々と。等。

五、疊語の感動詞

いざく。あはれく。まあく(口)
おやく(口) 等。

三 接頭語

み吉野 か弱し た走る 等は名詞の 吉野、形容詞の
弱し 動詞の走る、の語頭に、みか た 等の獨立し
ない語の添へるものである。かく上に添へる語を接頭語
といふ。前例の外、尙左に二三を示さう。

御代 生絲 幾年 小高し け近し いや益す 打
語らふ。差上ぐ。不似合。無慈悲。

又口語ではお手紙おあいにくなどの お、ご論ごゆつく
りの ご など常に用ひられる。

接頭語

四 接尾語

友どち かれら は名詞・代名詞の下に どち ら を添
へ、嬉しげ 白さ 赤み は形容詞の語根に げ さ
み を添へ、春めく 嬉しがる は、名詞・形容詞の下に、
めく がる を添へて成れる語である。かく下に添へる
語は獨立しては用ひられない。之を接尾語といふ。而し
て どち ら のやうに、多數の意を表すもの、又 めく
がる のやうに、動詞を作るものなど種々の意義や形式が
ある。

又、口語では華族がた 隔てがましい、苦しがる、寒け、
可愛げ、嬉しさう、子供たち、木村さん、大尉どの、神
さま、男ども、勿體ぶる わたくしらなどの、がた が

接尾語

ましい がる け げ さう たち さん どの さま
ども ぶる らの やうな種類がある。

〔注意〕 接頭語接尾語は共に獨立しない語で、意味ないものと意味のあるものがある。

練習

- 一 疊語とは何か。
- 二 熟語とは何か。
- 三 接頭語とは何か。
- 四 接尾語とは何か。
- 五 左の文につきて、以上四種の語を摘出せよ。
 - (イ) 生まれて一代の宗師となり、死して百世の儀表となる。
 - (ロ) 足の痛みは異ならねど、頭の重さはやゝ薄らぎぬ。
 - (ハ) 田舎びたる人の正直なるはめでたし。
 - (ニ) 何事によらず、業に就きて怠るべからず。成功は急ぐべからず。

ず。唯常々心をこゝに存すべし。

- (*) 入學試験に合格したから、入校を許可された。(口語)
- (へ) 粗末ながら此の品差上げますから御笑留下さい。(口語)
- (ト) 當方も一同無事ですから御安心下さい。(口語)

第二節 品詞の轉成

讀本の讀みを覺ゆ。
早く行き、早く歸れ。

右の 讀み は、もと動詞であるが、名詞として用ひられ、又
早く は、もと形容詞であるが、副詞として用ひられてゐる。
かく品詞がその形のまゝに、他の品詞に轉ずるを、品詞の轉
成といふ。今左に之を略説しよう。

一 轉成名詞

氷の如き刃を振ふ。
 ほのぼのと霞かゝれり。
 この池の深さを問ふ。
 右の氷霞は動詞の連用形のいひ据われるもの、深さは形容詞の語根に接尾語さの添へるもので、何れも名詞と成れるものである。

〔注意〕 形容詞は夜長遠淺等の如く語根のまゝで名詞となり、又からし芥すし蟹等のやうに終止形の名詞と成れるものもある。

二 轉成代名詞

君は何處に行くか。
 僕は現に代數を學べり。

私は幸に無事なり。
 右の君 僕 私 は、何れも名詞の代名詞となれるもので、閣下 貴下 足下 御前 等皆この類である。

〔注意〕 自稱おのれを對稱とし方向あなたを人稱とするなどは代名詞相互の轉成である。

三 轉成副詞

字を美しく書く。
 よく運動します。勉強す。
 明日御移りになりますか。
 右の美しくよくは、形容詞の連用形、ますますは動詞の終止形、明日は名詞より、何れも副詞に轉成せるものである。

四 轉成接續詞

御出下され候處、折悪しく不在にて失禮致候。
日曜及び土曜の兩日には、科外講義あり。

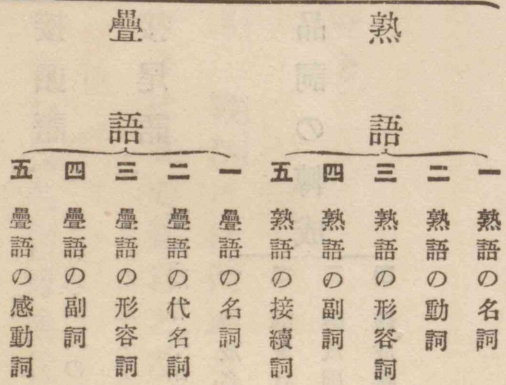
右の處は名詞より、及びは動詞より、それと轉じて接續詞となれるものである。

〔注意〕 候文に用ひる間條の類も接續詞となれるもので、又助詞のばとどもがにを等も轉じて接續詞の用をなすものである。

練習

- 一 左の名詞の構成を説け。
こゝろえ(心得)。たうゑ(田植)。いさめ(諫)。との居(殿居)。たむけ(手向)。惜しげ。悲しさ。未廣。見舞。書附。苦しみ。織物。
- 二 左の代名詞の構成を説け。
私ども。かれら。あなた方。かしこ。我々。貴殿。汝ら。

單語の構成摘要



- 三 形容詞の轉じて副詞となれるもの五種を挙げよ。
- 四 左の副詞の構成を示せ。
返すく。況や。見るく。たとへ。絶えず。
- 五 左の接續詞は、如何なる品詞より成れるか。
從ひて。依りて。或は。併ながら。竝に。而して。若しくは。

接頭語

接尾語

品詞の轉成

- 一 名詞の頭に添ふもの
- 二 形容詞・動詞の頭に添ふもの
- 一 多数の意を示すもの
- 二 動詞・形容詞・副詞等を作るもの
- 一 轉成名詞(動詞・形容詞より)
- 二 轉成代名詞(名詞より)
- 三 轉成副詞(名詞・動詞・形容詞より)
- 四 轉成接續詞(名詞・動詞より)

第三編 文章篇

第一章 文の成分

第一節 主語

山高し。

これは櫻花なり。

深さは五尺に達せり。

戦ひ始めり。

右の 山 此れ 深さ 戦ひ は、何れも叙述の題目となるものである。かやうに文の題目となるものを主語といふ。

主語は、名詞(轉成名詞を含む)代名詞(轉成代名詞を含む)よ

主語

り成り、はもののがなどの助詞を添へて用ひられ

第二節 述語

花咲く。

兒童本を讀む。

溪水は清し。

文化の進めるは第一たり。

われは日本人なり。

それこそ名譽なれ。

右の 咲く 讀む 清し 第一たり 日本人なり 名譽

なれ は、何れも説話の題目、即ち主語について叙述してゐ

る。 かやうに文の叙述をなすものを述語といふ。

述語

述語となるものは主として、動詞、形容詞又は助動詞である。

(注意) 文は少くとも一つの主語と、一つの述語とを要する。

第三節 補語

私は字を書く。

友人はこれを好む。

農民豊作を喜ぶ。

右の 私 友人 農民 は、主語で、書く 好む 喜ぶ

は、述語である。されども、この二語のみでは、その叙述が確

かでない。更に叙述の目的を示す語、即ち 字 これ 豊

作 のやうな語を要する。かやうに叙述の目的を示す語

を補語といふ。

容貌、母親に似る。

補語の一

有對他句
目的格助詞
副詞
主格
後格
副格
目的格
助詞

文の主成分

補語の二

教師、生徒に理科を授く。
教師、音讀を讀みといふ。
少女、花を美しと叫ぶ。
右の文も、主語述語のみでは、その意味が明かでない。理科、音讀、花の外更に、母親、生徒、讀み、美しといふやうな語を補うて、始めて完全な意味となる。かく叙述の標準を示す語も補語である。
補語となるものは、主語のやうに名詞、代名詞であつて、之に助詞を添へるものと、にとより、など添へるものがある。

以上述べた主語、補語、述語を、文の主要成分といふ。

〔注意〕 熊は性猛し。日本は土地肥えたり。の文に於て、「性猛し」「土地肥えたり」といふ文を述語として、熊は日本はは主語として立てる如き観がある。かゝ

る語を總主といふ。

第四節 修飾語

一陣の風、さつと吹く。

有爲の少年は有益なる書を廣く熟讀す。

親愛なる友は眞心こめたる忠言を、彼れの友人に昨日篤と與へたり。

修飾語

右縦線の語は、何れも文の主要成分に添うて各、その意義を形容し、又は制限してゐる。かやうな語を修飾語といふ。修飾語には、前例の 一陣の 有爲の 有益なる 親愛なる 眞心こめたる 彼れの のやうに、形容詞的にその下位にある語に添ふものと、さつと 廣く 昨日 篤とのやうに、副詞的に添ふものとの二種がある。

部
敘述部

文の主要成分に修飾語の添へるものを部と稱し、主部に對して、補部・述部の二部を合せて敘述部といふ。今前例を表
示しよう。

	主	部	補	部	述	部
親愛なる	友	は	真心こめ たる	忠言を	彼れの	友人に
有爲の	少年は		有益なる	書を		廣く
一陣の	風					さつと
						吹く
						熟讀す
						昨日、篤と 與へたり
	修飾語	主語	修飾語	補語一	修飾語	補語二
					修飾語	述語

〔注意〕 述語の修飾語は他の語を隔て、置かれることがある。

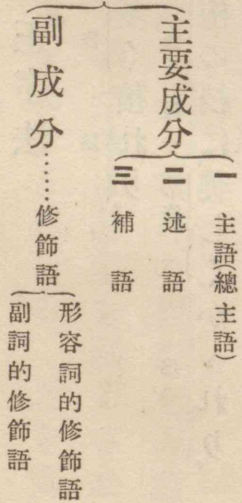
練習

- 一 文の主要成分とは何か。
- 二 總主とは何か。
- 三 修飾語は如何なる用をなすか。

四 左の文につきてその成分を區別せよ。

- (イ) 彼れは凜然たる意氣を有せり。
- (ロ) 小生、明日貴宅に御伺ひ致しませう。(口語)
- (ハ) 昨日學校より歸りがけに、某君の寓を訪問した。(口語)
- (ニ) 我が郷里は洋々たる利根川の河口にあり。
- (ホ) 我が國は、實に七千萬同胞の一家である。(口語)
- (ヘ) 此の人習字圖畫に妙を得てゐる。(口語)
- (ト) 安政年間米國使節ペルリ浦賀に來れり。

文の成分摘要



第二章 文の成分の排列

第一節 正序法

- 一、今朝の雪、多く積れり。
主 修 主 修 述
 - 二、今朝の雪、梅の枝に、美しくかゝれり。
主 修 主 修 補 修 述
 - 三、かの小兒、晝のある本をよく見る。
主 修 主 修 補 修 述
 - 四、老いたる父は、理科の本を幼き子に昨日與へたり。
主 修 主 修 補 修 述
- 右の如きは、文の成分排列の普通なもの、即ち正序法である。これを表にすれば左のやうである。

正序法

- 一、主語 述語
- 二、主語 補語 述語
- 三、主語 補語 述語

四、主語 補語 補語 述語

〔注意〕 一文中に二種の補語を具へるときは、文勢上注意すべきものを先に置くまでで、その順序は常に一定しない。

第二節 倒置法

- 一、君來給へ、余が家に。
三 一 二
- 二、祝へ、諸人もろともに。
三 一 二

どうして忘れませう、昨日の約束を。(口語)
かくの如く、語調を調へ、或は語勢を強くさせるために、文の成分の位置を變更することがある。之を倒置法といふ。

倒置法

第三節 省略法

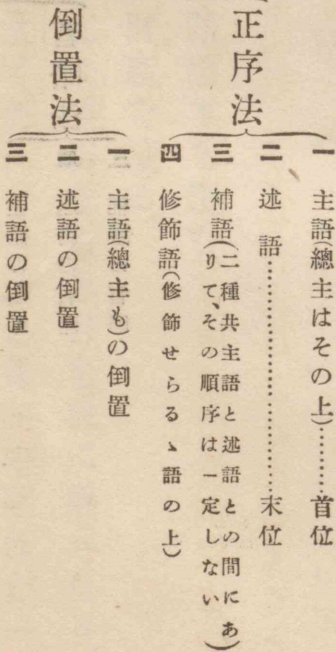
成分の省略

右のやうに、文の成分は前後の關係或は慣例によつて、その語を略すも、意味明瞭なる場合には、これを省くことがある。之を成分の省略といふ。

練習

- 一 文の成分の排列法を問ふ。
- 二 倒置法とは何か。
- 三 省略法とは何か。
- 四 左の文につきて、成分の順序を正し、且省略せられたる成分を補へ。
- (イ) 今年の暑中休暇をあなたはどう利用なさいですか。(口語)
- (ロ) 古來稀なり、豊公の偉業の如きは。

文の成分の
排列摘要



- (ハ) 口は禍の門。
- (ニ) 何日頃落成するでせう、新校舎の建築は。(口語)
- (*) 幾日に御出下さいますか。(口語)
- (ヘ) 勇氣鬱勃たる我が軍は、敵の根據地を容易に占領せり。
- (ト) 昨日の談話會は、實に愉快であつた。(口語)
- (チ) 君知り給ふか、この問題の解式を。
- (リ) 我が國體は世界無比。

- 省略法
- 一 主語の省略
 - 二 述語の省略
 - 三 補語の省略

第三章 文の種類

第一節 文の構成上の種類

既に述べたやうに、文には單一なるものばかりでなく、複雑なるものが多い。文を其の構成上より分類すれば、左の三種類となる。

一 単文

- (イ) 山高し。
- (ロ) 兒童、國語讀本を讀む。
- (ハ) 父子に財産を譲る。
- (ニ) 親しき友は、懇切なる忠告を、我に與へたり。

右は單純なる文で、何れも主語と述語の關係が一回に止ま

單文

る。其の成分を排列すれば左の如くである。

(イ) 主語—述語

(ロ) 主語—補語—述語

(ハ) 主語—補語—補語—述語

(ニ) 主部—補部—補部—述部

右のやうに、主語と述語との關係が一回に止まるものは、單文である。

〔注意〕 主語補語の數が如何に多くても、主語補語の關係が一回に止まるものは單文である。

二 複文

(イ) 生徒、山水を畫く。

い 生徒の山水を畫ける卷物あり。

句

(ロ) 學生螢雪の功を積む。

る 學生の螢雪の功を積むは偶然にあらず。

(ハ) 雨降りたり。

は 雨降りたれば道わろし。

(ニ) 容貌父に似たり。

に 兄は容貌父に似たり。

右の(イ)(ロ)(ハ)(ニ)の四文は他に接續する必要から、(い)(ろ)(は)(に)の

やうに、他の文の一部分に變ずることがある。かく、文の獨

立を失つて他の文の一部分をなすものを句といふ。句に

は左の種類がある。

形容詞句

(イ) 生徒の山水を畫ける卷物あり。

(名詞卷物を形容してゐる)

名詞句

(ろ) 學生の螢雪の功を積むは偶然にあらず。

(主語の位置に立つて名詞の用をなす)

副詞句

(は) 雨降りたれば道わろし。

(わろしに添うて副詞の用をなす)

叙述句

(に) 兄は容貌父に似たり。

(兄の一部分容貌の叙述をなす)

右の形容詞句名詞句副詞句叙述句の四種は、何れもある文に附屬して用をなす。これ等の文は、主語と述語との關係少くとも二回成立する。一つ以上の句を含んで、主語と述語の關係が二回以上成立するものを複文といふ。複文には左のやうに要素の具はらないものもある。

複文

人驕れば衰ふ。

文藝の趣味ことに深し。

性質溫和なり。

友來らば共に散歩せむ。

地球は平面なりといへり。

三重文

(イ) 兄は學校に行く。

弟は商家に使ひす。

(い) 兄は學校に行き、弟は商家に使ひす。

(ロ) 富士山は本州に聳ゆ。

新高山は臺灣に峙つ。

(ろ) 富士山は本州に聳え、新高山は臺灣に峙つ。

節
重文

右の(イ)(ロ)は何れも二文であるが、之を接続すれば(いろ)のやうに一文となる。されども上下從屬の關係なく、何れも對等の位置を保つて獨立してゐる。

右のやうに一文中で對等の位置を保つて獨立する各の文を節といひ、節を含める文を重文といふ。

〔注意〕

前例を兄は學校に行けども、弟は商家に使ひす、富士山は本州に聳ゆれども、新高山は臺灣に峙つとのやうにすれば、副詞句を含む故に複文となる。

重文には左のやうに、要素の具はらないものがある。

花は櫻木、人は武士。

旅は道づれ、世はなさけ。

家傾き、草蔓る。

滿つれば缺け、奢れば減ぶ。

前に述べたやうに、文を其の構成上から分類すれば單文・複

文・重文の三種となるが、實際はこれ等の文互に錯綜して用ひられてゐる。

山高ければ、氣候寒く、川長ければ、水量多し。

右は、複文二つより成れる重文である。

花咲き、鳥鳴く、春の景色こそ愉快なれ。

右は、重文を含める複文で、其の重文の部分は、形容詞句の形

をなしてゐる。

練習

左の文につきて、其の種類を分ち、且其の句節を區別すべし。

一 生絲は日本の名産なり。

二 朱舜水、徳川光圀に聘せらる。

三 明日、用事なくば遠足しよう。(口語)

四 人を誹れば、己も亦人に誹られる。(口語)

- 五余、歸校の途、董の石垣の中に咲けるを見たり。
- 六夏來れば樹蔭も熱く、冬立てば南窓も寒し。
- 七光陰の速なるは恰も水の流るゝに似たり。
- 八國運、旭の昇るが如し。

第二節 文の性質上の種類

文の構成上より單文・複文・重文の三種類に分類することは、既に述べた如くであるが、若し、文の性質上より見れば、**平叙文・疑問文・命令文・感動文**の四種類がある。今、左に、その大要を説明しよう。

一 平叙文

吉野山は、今、花盛りの季節なり。

平叙文

余は、彼の人の性行を詳に知れり。彼れは、非常に勉強せしなるべし。一日も早く父母に遇ひたい。(口語)

平叙文は、右のやうに、事實を有りのまゝに叙述するもので、これを更に分類して、肯定文・否定文・推量文・希望文等とすることがあるが、今は總括して、**平叙文**と云ふ。平叙文の終結は、用言の終止形であるが、上に「ぞなむ」があれば連體形、こそ」があれば已然形を以て終結とする。

二 疑問文

金甌無缺なる我が國に比すべき國ありや。彼れは、果して賢材なるか。雲の何處に、月宿るらむ。

疑問文

色こそ見えね、香やは隠るゝ。
彼れは如何なる人ぞ。

疑問文は、右の如く、疑問の意を表すもので、終結は疑問の助詞や、か、若しくは、疑問の詞、何處に、如何なる、反語の、やは、かは、などを添へて用言の連體形にするか、或は、上下に疑問の語を用ひるを常とする。

三 命令文

朝早く起きよ。
一層善かれ。
明日までにこの用事を濟すべし。
他言すること勿れ。
油斷すべからず。

手を觸れるな。(口語)
春な忘れそ。

命令文は、右の如く命令禁止希望の意を表すもので、終結は用言の命令形を用ひるを常とするが禁止の場合は、勿れべからず、な、なそ、等を用ひる。而して、命令文には、主語の省略されることが多い。

四 感動文

あゝ名譽なるかな。
あはれ、今年の秋も往ぬめり。
三笠の山に出でし月かも。

感動文は、かく感動詞を含むを常とする。然れども、感動詞を含みても、往々全體より見て、感動文となし難いものがある。

感動文

る。例へば、

いざ、出發せむ。

いで、御消息聞えむ。

などのやうである。よく其の場合を區別するを要する。文の性質上、以上の四種に分解されるが、實際は平敘文が最も廣く用ひられ、之に他の文が加はつて使用されてゐる。

練習

左の文を、性質上より分類せよ。

一 京都は、古より風光明媚を以て稱せらる。

二 學生諸君、日々勉勵せられよ。

三 あはや、法皇の流されさせおはしますぞや。

四 人々、時局に鑑み、一層奮勵せねばならぬ。(口語)

五 「言葉多きは、品少し。」といふ諺がある。(口語)

六 日本人ほど、國民全體に、あはれを知つた、即ち詩人的なものは、恐

らく世界中にあるまい。(口語)

七 武人の愚にも困り候へども、どちらかと申候へば、寧ろ、文弱の書生には優り申すべきか。

八 物思ふ我れに聲な聞かせそ。

九 我が身の事、知らであるべきかは。

十 折々に、遊ぶ暇はある人の、暇なしとして、よみ讀まぬかな。

十一 書いて居ながら筆を氣輕にどん／＼進めてゆくことはないか。(口語)

十二 あゝ、定めなき人の世や、頼まれぬ人の身や。

十三 茫茫天地、知らず自己を除却して誰の援助を求むべき。

十四 時と稱する大時計には、唯一語が記されてあるのみ。曰く「今」。

十五 散文がだん／＼旺んになつて行くに拘はらず、尙一方に韻文の存在し居るといふことは何故であらうか。(口語)

一 單文……

主語と述語の關係一回に止まり、簡單なる思想を表す。

文の種 類摘要

- 一 構成上
 - 二 複文：
 - 附屬句を含んだ文で、主語と述語の關係が二回以上なるもの。
 - 節を含んだ文で、單文の重るもの、複文の重るもの等。
- 二 性質上
 - 一 平叙文：事實をすなほに叙述したもの。
 - 二 疑問文：疑問の意を表はすもの。
 - 三 命令文：命令禁止希望の意とを表はすもの。
 - 四 感動文：感歎の意を表はすもの。

第四章 文の係結

係結

文の首尾を完全にするために、文の上に立つ助詞と、下を結ぶ用言に、一定した慣用がある。之を係結といふ。文の上に立つ助詞は係辞で、下を結ぶ用言は結辞である。左にその重なるものを挙げよう。

第一節 普通の係結

- 花 咲く。
- 犬 は 走る。
- 小兒 も 喜ぶ。
- 花 の 咲く。
- 私 が 見たる事なり。

第一段の係

終止形で結ぶ

右のやうに、上に立つ語に、助詞の添はないもの、及び、は、も、の、が、等の添へるものを、**第一段の係り**といふ。係り詞を呼ぶには、が、の係り、の、の係り等と、助詞を擧げて唱へるが、助詞の添はないときは、徒まの係りといふ。第一段の係りを結ぶには、動詞・形容詞・助動詞の**終止形**を用ひる。

花ぞ落つる。

風なむ烈しき。

雪か消ゆる。

中や絶えなむ。

世の中は何か常なる。

誰かそこにある。

右の如く、ぞ、なむ、か、や、等の、首位の語に添ふこと

第二段の係

連體形で結ぶ

を**第二段の係り**といふ。

第二段の係りを結ぶには、動詞・形容詞・助動詞の**連體形**を用ひる。

〔注意〕 疑のなにたれいくなどが首位にある場合も結辭が同じい。

花こそ咲け。

人こそ見えね。

秋こそ清けれ。

右のやうに、こそ、の、首位の語に添へるものを**第三段の係り**といふ。

第三段の係りを結ぶには、動詞・形容詞・助動詞の**已然形**を用ひる。

以上の三種は係結法の通則である。

〔注意〕 第一段の係と第二段の係、又は第三段の係を重ねて用ひるときは、第二段

の係又は第三段の係を受けて文の終りを結ぶ。但第二段の係と第三段の係を重ねては用ひない慣例である。

第二節 轉 結

前述の通則以外に種々の結法がある。今、其の重なるものを擧げよう。

汝、午前中、修身訓を讀め。

疾く、庭前の塵を捨てよ。

死すとも退くこと勿れ。

右のやうに、命令、禁止の場合には、用言の命令形を以て結ぶ。

この價幾圓なるか。

君は、彼の人の性質を知れりや。

これは何物ぞ。

命令形の結び

疑問助詞の結び

右のやうに、疑問の場合、か、や、ぞ、等 疑問助詞を以て結ぶ。

嗚呼偉大なるかな。

花の色は移りにけりな。

三笠の山に出でし月かも。

右のやうに、感動詞を以て結ぶこともある。

花は咲きたれども、鳥は鳴かず。

花ぞ咲きたれども、鳥は鳴かず。

花こそ咲きたれども、鳥は鳴かず。

右のやうに、句を含める文では、上に係辞があつても、其の句の終や、又は、文の終で、これに應ずる結びを用ひない。

忠孝は、我が國道德の根源。(なり)

谷風に、融くる氷の、ひまごとに、打出づる波や、春の初花。

句を含める文

感動詞の結び

省略

右は、名詞で結べるやうに見えるが、文の成分よりいへば、或語の省略せられたるものである。

ある人、某は、畫に巧なり」といへり。

ある人、某ぞ、畫に巧なる」といへり。

ある人、某こそ、畫に巧なれ」といへり。

右のやうに、挿入文は、文全體の係結に、關係を及ぼさない。

いづこを果としら波の。

いかにして、今まで世には、あり明の、つきせぬものを厭

ふ心は。

かく掛詞の場合は、上の係辭に關せず、其の掛れる部で上を結び、更に、それを起點としてこれに應ずる結を取る。

掛詞

練習

左の文につき、係結を指摘し、且其の誤れるものは之を正せ。

一 長く交はりてこそ、人の性質は知らるれ。

二 中江藤樹こそ眞儒なる。

三 諸君よ好んで人の長短を議すること勿れ。

四 今こそ落ちぶれたれども、我れも、昔は、槍一すぢの主なりき。

五 思ひ立ちしまゝに、かくなむ。

六 此の度の試験には、我れこそ優等なれと思へども、如何あらむ。

七 進取敢爲の氣象、俄に挫けたるこそ、返すくも惜しきことなる。

八 今朝こそ、早く起きたれど、目的の如く、勉強し能はざりき。

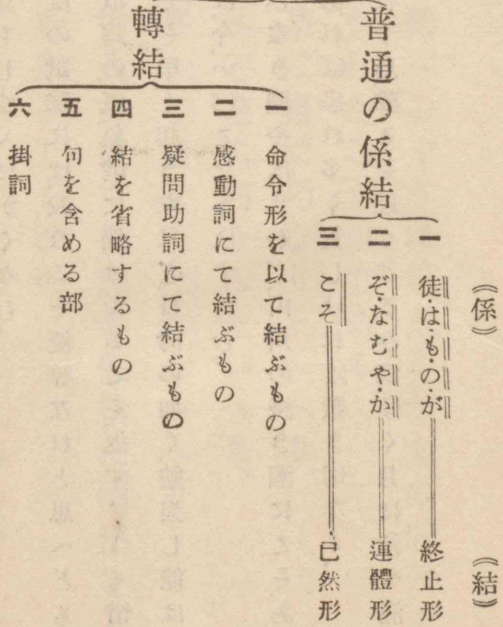
九 主君は、今、いづこにやはすらむ。

十 そこひなき淵やはさわぐ、山川の浅き瀬にこそ、あだ波は立て。

十一 寶あれば恐れ多く、貧しければ歎き切なり、

十二 さ夜千鳥聲こそ近くなるみ瀉、傾く月に汐や満つらむ。

係結摘要



附録 文法上許容に関する事項

- 一、「居リ」「恨ム」「死ヌ」ヲ四段活用ノ動詞トシテ用キルモ妨ナシ
- 二、「シクシシキ」活用ノ終止言ヲ「アシシ」「イサマシシ」ナド用キル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ
- 三、過去ノ助動詞ノ「キ」ノ連體言ノ「シ」ヲ終止言ニ用キルモ妨ナシ

例

火災ハ二時間ノ長キニ互リテ鎮火セザリシ

金融ノ靜謐ナリシ割合ニハ金利ノ引弛ヲ見ザリシ

- 四、「コトナリ」(異)ヲ「コトナレリ」「コトナリテ」「コトナリタリ」ト用キルモ妨ナシ
- 五、「ハ」セサス「ト」イフベキ場合ニ「セ」ヲ略スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例

手習サス

周旋サス
賣買サス

六、「、セラル」「トイフベキ場合ニ、、サル」「ト用キル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例

罪サル
評サル
解釋サル

七、「得シム」「トイフベキ場合ニ「得セシム」「ト用キルモ妨ナシ

例

最優等者ニノミ褒賞ヲ得セシム
上下貴賤ノ別ナク各地位ニ安ンズルコトヲ得セシムベシ

八、佐行四段活用ノ動詞ヲ助動詞ノ「シシカ」ニ連ネテ「暮シシ時」「過シシカ」「ナドイフベキ場合ヲ「暮セシ時」「過セシカ」「ナドスルモ妨ナシ

例

唯一遍ノ通告ヲ爲セシニ止マレリ

攻撃開始ヨリ陥落マデ僅ニ五箇月ヲ費セシノミ

九、てにをはノ「ノ」ハ動詞助動詞ノ連體言ヲ受ケテ名詞ニ連續スルモ妨ナシ

例

花ヲ見ルノ記
學齡兒童ヲ就學セシムルノ義務ヲ負フ
市町村會ノ議決ニ依ルノ限リニアラズ

十、疑ノてにをはノ「ヤ」ハ動詞形容詞助動詞ノ連體言ニ連續スルモ妨ナシ

例

有ルヤ
面白キヤ
父ニ似タルヤ母ニ似タルヤ

十一、てにをはノ「トモ」ノ動詞使役ノ助動詞、及受身の助動詞ノ連體言ニ

例 連續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

數百年ヲ經ルトモ

如何ニ批評セラルルトモ

強ヒテ之ヲ遵奉セシムルトモ

十二、てにをはノ「ト」ノ動詞、使役ノ助動詞、受身ノ助動詞、及時ノ助動詞ノ連續言ニ連續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

月出ヅルト見エテ

嘲弄セラル、ト思ヒテ

終日業務ヲ取扱ハシムルトイフ

萬人皆其德ヲ稱ヘケルトゾ

例 十三、語句ヲ列舉スル場合ニ用キルてにをはノ「ト」ハ誤解ヲ生ゼザルトキニ限り最終ノ語句ノ下ニ之ヲ省クモ妨ナシ

月ト花

宗教ト道德ノ關係

京都ト神戸ト長崎ヘ行ク

最終ノ「ト」ヲ省クトキハ誤解ヲ生ズベキ例

史記ト漢書トノ列傳ヲ讀ムベシ

史記ト漢書ノ列傳トヲ讀ムベシ

十四、上ニ疑ノ語アルトキニ下ニ疑ノてにをはノ「ヤ」ヲ置クモ妨ナシ

例

誰ニヤ問ハン

幾何ナルヤ

如何ナル故ニヤ

如何ニスベキヤ

十五、てにをはノ「モ」ハ誤解ヲ生ゼザル限リニ於テ「トモ」或ハ「ドモ」ノ如ク用キルモ妨ナシ

例

何等ノ事由アルモ(アリトモ)議場ニ入ルコトヲ許サズ

期限ハ今日ニ迫リタルモ(タレドモ)準備ハ未ダ成ラズ

經過ハ頗ル良好ナリシモ(シカドモ)昨日ヨリ聊カ疲勞ノ狀アリ

誤解ヲ生ズベキ例

請願書ハ會議ニ付スルモ(ストモ)之ヲ朗讀セズ

給金ハ低キモ(クトモ)應募者ハ多カルベシ

十六、「トイフ」トイフ語ノ代リニ「ナル」ヲ用キル習慣アル場合ハ之ニ從フ

モ妨ナシ

例

イハユル哺乳獸ナルモノ

顔回ナルモノアリ

理由書

國語文法トシテ今日ノ教育社會ニ承認セラル、モノハ徳川時代國學者ノ研究ニ基キテ専ラ中古語ノ法則ニ準據シタルモノナリ然レドモ之ニ

ノミ依リテ今日ノ普通文ヲ律センハ言語變遷ノ理法ヲ輕視スルノ嫌アルノミナラズコレマデ破格又は誤謬として斥ケラレタルモノト雖モ中古語中ニ其用例ヲ認メ得ベキモノナシトセズ故ニ文部省ニ於テハ從來破格又ハ誤謬ト稱セラレタルモノノ中慣用最モ弘キモノ數件ヲ舉ゲ之ヲ許容シテ在來ノ文法ト並行セシメント期シ其許容如何ヲ國語調査委員會に諮問セシニ同會ハ審議ノ末許容ヲ可トスルニ決セリ依テ自今文部省ニ於テハ教科書檢定又ハ編纂ノ場合ニモ之ヲ應用セントス

簡明日本文典終

今文讀本ニ就テハ海峽南洋羣島ノ諸國ニ於テハ
 本委員會ノ調査ニ依リテ本典ニ採録スルモノハ
 其ノ中ニハ南洋羣島ノ諸國ニ於テハ其ノ中ニ
 古語中ニ其ノ中ニ其ノ中ニ其ノ中ニ其ノ中ニ

簡明日本文典

大正元年十一月二十三日印刷
 大正二年十二月二十六日訂正再版印刷
 大正三年一月二十三日訂正再版印刷
 大正七年十一月二十五日修訂再版印刷
 大正八年十二月九日修訂再版印刷
 大正九年十二月廿九日修訂再版印刷
 大正十年六月六日發行

定價金 四拾四錢
 大正十五年度 七拾五錢
 臨時定價金

編者 光風館編輯所

東京市神田區通神保町六番地

發行者 上原才一郎

東京市神田區通神保町六番地

發行所 光風館書店

〔振替口座東京三二七番〕
 電話園大手七三四〇番

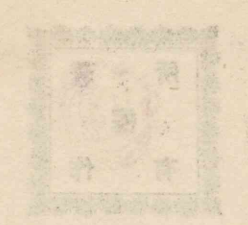
東京市神田區通神保町六番地

印刷者 四海民藏



本館發行ノ教科書ハ常に多數ノ製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に
 賣切等にて課業に御差支の節は直接御注文被下候はゞ直に御送附可致候

太
天
大
大
天
太
天
大
天
大
天
太
天
太
天
太
天



賣
本
書
日
本
海
軍
大
學
堂
印
行
本
書
之
目
的
在
於
傳
播
海
軍
之
理
論
及
實
際
戰
術
之
精
髓
以
便
海
軍
界
之
人
士
參
考
研
究
其
內
容
充
分
詳
盡
且
易
於
理
解
誠
為
海
軍
界
之
寶
貴
之
讀
物
也
凡
欲
購
者
請
向
各
大
書
局
或
直
接
向
本
堂
接
洽
為
荷

海
軍
大
學
堂
印
行

大
學
堂
印
行

大
學
堂
印
行

大
學
堂
印
行



庫
4
61

広島大学図書

2000025661

